
終焉をもたらす者

みーさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終焉をもたらす者

【Nコード】

N00190

【作者名】

みーさん

【あらすじ】

よく分からないうちにドラゴンドライブ最終巻の真竜と元龍の融合に巻き込まれてしまった。僕はこれからどうすればいいんだ？とありえず、観光旅行にでも行きますか。

テンプレ転生モノです。

主人公の名前を変更しました「フィーネ」「ルシア」

プロローグ (路線変更に基づきちょっと変更) (前書き)

僕はドラゴンドライブが好きでした。で、漫画を押し入れから引っ張り出して読み、このサイトで検索してみたら引っかかったのはわずか一件。衝動的に書きました。

プロローグ (路線変更に基づきちょっと変更)

僕は絶賛降下中だ。

羽も生えてないし、魔法のような都合のいい能力もない。つまり、完全自由落下ののち、地面にペシヤリだ。

なぜこんなことになったのだろう。僕はこうなった経緯を走馬灯として思い返していた。

始まりは白い部屋で目覚めたことだった。いや、そこは部屋と言ってもいいのだろうか。何も無い白いだけの空間。そこに僕はいた。

「はい？」

理解できない。僕は死んだ。それは確定だ。争いの絶えない世界だったからだ。だが、悔いはない。

「あー。またかよ。つい数日前来たばかりだぜ？ 輪廻転生の管理はどうなってるのよ。しかも前に来た奴は「テンプレ乙！これで俺もチートオリ主だぜ！ フヒヒ・・」とか言ってるウザイことこの上なかったし。やる気失せるわ！ しかも願いが王の財宝とか、どんだけ欲張りなんだ！

でもこいつにも能力もたせないといけないんだよな。一応決まりごとだし」

いきなり男が現れて何かを呟き始めた。輪廻転生？ 能力？ 一体何のことを言ってるんだ？

「あー、もう考えるのめんどくせえ。ん？ ああ。まあ、あれでいいや。人間には過ぎた力だけど、何か不老不死化しそうだけど。まあ、前の人間にやるよりかはましだろ」

男は僕を無視して話を進めていく。何を言っているかは分からない

いが、僕のこととということだけは間違いなさそうだ。一応、力をくれるということだけは分かるが……。

男がこちらを向く。

「めんどくせえから手短に言っぞ。お前を転生させる。能力やる以上。じゃあな」

僕の下の地面だけが急に真っ黒に染まり、僕はその穴に落ちた。

うん。ワケが分からない。能力っていうのも結局貰ってないし、転生させるといつてもこのままじゃ転生直後にスプラッタで死亡だこうして無理やり輪廻の環に戻すのが神様の手口とでも言うのか？絶望ものだぞ？

でも人間慣れというものは恐ろしいもので、こうしてなんだかなだ考えている内に落ち着いてきた。

とりあえず周囲を確認してみる。

雲ひとつない快晴のなかを落下中だったので、遠くまで見わたせた。

「は？」

僕は目を疑った。僕は背中を下に向けて降下しているはずだ。なのに、目の前には山脈がある。

そしてこちらにもものすごい勢いで向かってくる正八面体のクリスタル。

下を向いてみると、そちらも野山。だがアスファルトの山道が見えるので、そちらの方が現代っぽい。

そちらからは丸い、光を放つ球体。

何か、地面に着く前に死にそうなんですけど……。
そして視界にチラツと映った……ドラゴン？何か見たことがある。結構昔にやってた話で確か……そう、ドラゴンドライブだ！

ここって最終巻の真龍と元龍が融合するところじゃないか！

「こんなの納得できるか〜！！！！！！」

僕はクリスタルと球体の衝突に巻き込まれ、意識を失った。

ドオオオオン！！！！

と、右手に走った衝撃で目を覚ました。急いで右手を確認するとそこには銀と金の外殻。青白い鋭い爪。手の平は甲羅のようなものではなく、宇宙を感じさせる黒い地に、青白い星の光が光っている。姿勢としては四つんばいに近い格好になっているのだが、これが必然で自然のような感じがする。

僕はどうなったのだろうか。確か、神龍石と元龍のコアの衝突に巻き込まれて……。

まあ、とにかく状況を確認しよう。目の前にはあの漫画で見たドラゴン、ドラゴン、ドラゴン。ええと、センコークーラにライコーオー・イデア。カンパー、ゴーラオー、ライライコクーン、サンダーボルトwithジュピターエッジ。最後にハヤテスラッシュ。うん。最終戦のドラゴン勢揃いだ。

僕の身体は真龍を基本として、元龍の外殻がついているといった感じか。

最後に出てきた融合体のビジュアルはどうかと想像していたので、良かった。って僕はなにを言っているんだ。

確かドラゴンドライブの最後は、ドラゴンたちが精霊に戻ることで融合した真龍と元龍を消し去ったはずだ。もしかすると僕も同じ運命？それは嫌だ。

今、僕は原作のドラゴンたちから攻撃を受けている。僕自身、この世界を消し去る存在だと思われているのだから。どうにかして敵対の意思がないことを伝えなければ。

「何で攻撃してこねえ。舐めてんのか!？」

雷を放つドラゴンに乗った男、まあロツカクさんだが……が攻撃をいったん止め、他のドラゴン乗りたちに言う。

そ、そうだ。とにかくまずは言葉で意思を伝えないと。

僕はそう思ってた口を開いた。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

こ、言葉が話せない。

しゃべろうとした僕の口から出たのは単なる咆哮だった。

その咆哮と共に、空気がびりびりと震え、地面が割れる。

ちよっ!これまじくはないか!?

「うわあ!いいいきなり動き出しやがった!」

萩原君。勘違いしないでくれ。僕はちよつと喋ろうとしただけなんだ。

ドラゴンたちは攻撃を再開する。痛くはなさそうだけど、このままは非常にまずい。何とかならないか。

……そう!人の姿に戻れば!そうだよ。僕だって人間なんだからさ。出来るはずさ!

僕は人間の身体を思い浮かべる。

しかし……

あれ?僕ってどういう感じの人だったっけ?全然思い出せない。自分の顔をまじまじと見る趣味なんてなかったしな。

しかも整ってはいたが中性的な顔立ちだったことが災いしていつそう思い浮かばない。

ええい！もうなんでもいい！何か思い浮かぶものはないか？漫画でもゲームでもいい！何か！

結局、思い浮かんだのは僕が好きだった「Star Ocean 3」。何がどうなったかわからないまま。僕の身体は光りに包まれた。

Side・雪野タクミ

もう駄目だ。最後の手段を使う他、この世界を救う術はない。

「真龍・元龍がいるからドラゴンがいる。ドラゴンがいるから、真龍・元龍がいる。」

地球にドラゴンがいなかったのは地球の元龍が具現化していなかったから……。

だからRi-INは元龍を具現化させるために地球に無理やりドラゴンを具現化させたんだ！」

ボクは元龍の中で見てきた映像を基にみんなに説明する。

「……つまり？」

レイジ君が真剣な顔で催促する。

「地球と裏球のドラゴン全てが消えれば、あのドラゴンも消えてしまっただけ……。」

光が治まった。

僕は当然のように宙に静止し、直立していた。自分の体を確認する。

髪は腰に届きそうな長さの蒼髪。身体の線は細く、身長は166cmと目測、前の身長と変わってない。僕は十四歳だったので、平均身長よりは上か。

どう見ても「Star Ocean3」のマリアト・レイター。男なので、履いているのはズボンだが。

あー。マリアって鬼畜技が多いからかなりの頻度で使ってたんだよな。僕は男なのでフェイトが理想だったけど、こんな所で不満を言っても仕方ないか。

そう。人間の姿に慣れてよかったと思わないと。

ここで、あの白い部屋で会った男の言っていたことを思い出した。能力ってこのことだったのか？真龍と元龍の力ってやりすぎだろう。世界を崩壊とかできるぞ。

ドラゴンドライブの登場人物たちは、「あのドラゴンは何処に行きやがった」とか、「これからどうすればいいの？精霊化は？」とか言っている。とにかく、挨拶と行きますか。

僕はレイジたちの所まで飛んで行った。混乱しているレイジ君たちに出るだけ気さくに話しかける。不信心はバリバリだが。

「こんにちは」

「っ！！誰っ！！」

それにいち早く反応したのはメグルさんだ。

「僕？僕はさっき攻撃されてたドラゴンだ」

そういうと、誰もが戦闘体勢に入った。そうだよな。僕でもそう

する。

「そんなに警戒しないでくれないかな・・・僕には敵対の意思はない」

「それを信じろってえのか!？」

ロツカクさんがナイフを突き出して言う。

「それしかないだろうね。僕という異物が混ざった真龍、元龍は、たとえドラゴンを精霊化したとしても消えるかどうか分からないよ?それに、破壊の意思はないのだから。あとはそちらの問題だ」

反具現化うんぬんのはハツタリだ。実際にされたら僕も消えてしまうかもしれない。だから、早い内に反具現化の話を出して、止めたかっただけだ。

「僕が力の放出を抑えている今、地球と裏球の融合は滞り、時と共にはなれて終わりなんじゃないかな。地球でのドラゴンの具現かもないようだし、裏球の側にドラゴンを押し込んでおけばいいんじゃないの?」

「・・・はあ・・・」

「

何か皆、同じように脱力した。

「まったく・・・せつかくいい感じになってたのに。真剣に覚悟決めてた私たちが馬鹿みただわ・・・」

ゴーラオーの頭の上に載っている雪野麻衣子が目頭を押さえる。

他の人たちもウンウンとうなずいている。

「何が起こったかよく分からないけど・・・ライコーオーとお別れしなくてもいいってことだよな」

「そのとおりだよ。もつとも、地球にドラゴンがいたらまずいだろうから、裏球に連れて行かなければならないけど。まあ、ジゲンジョーカやRi・ONの技術を使えば行き来できると思うな」

ゴゴゴゴ・・・

空に浮かぶ裏球の景色が少しずつ離れていく。時間が無いな。

「僕が何者か、というのも気になるところだと思っけどもう時間が無い。さっさと地球に具現化しているドラゴンたちを送り返さないと、裏球とのつながりが閉じてしまう」

その後、僕たちは地球に具現化しているドラゴンを裏球に送り返すため、日本中を駆け巡った。

その途中で自分の能力の確認を行ったのだが、正直力が大き過ぎて、ちよつと気を抜くと一撃で地形を変えてしまうので注意が必要だった。

攻撃の種類に関しては流石「全」属性。時や生物を操るとか、または生み出すとか神の領域に踏み込みそうな能力は出来ないが、ドラゴンドライブに順ずる基本能力、光、闇、炎、水、風、地、雷、甲の属性攻撃が使える、真龍、元龍の能力、エネルギー無限吸収や物質透過、全属性攻撃としての消滅波など、その能力は多岐に渡る。

そして日本中のドラゴンを空に打ち上げ、僕たちはDDセンターのあった、破壊されつくした市街地に戻ってきて、自己紹介だけは済ませた。名前と漫画に出てきたくらいの設定は知っているけど。

僕はそこで始めて自分の名前が思い出せないことに気がついた。そこですつと浮かんだ「ルシア」を名乗った。特に理由はないが、浮かんできたのならこれでいいだろう。僕がどういう名前だったのか、思い出せないし。

空は既にもとの青さを取り戻している。

「で、貴女はいつたい何者なのかしら」

「さんが疑いの眼差しで聞いてくる。まあ、当然だが。」

「僕は、さつきも言ったとおり、真龍と元龍が融合したドラゴン

です」

敵密には、それに僕という異物が挿入されたものだ。

「僕イコール真龍であり元龍、ということになりますね」

まあ、これも事実だ。白い部屋にいた男、まあ、仮に神様も碌でもないところに送ってくれた。説明が大変じゃないか。

「これまでの貴女の力を見ると、信じないわけにはいかないんでしょうね・・・」

「改めて言うておきますけど、僕にはあなたたちに敵対しようという意思はありません。もっとも、人間の見方というわけでもありませんが。裏球を旅してきたレイジ君たちなら分かるんじゃないかな？ドラゴンたちがオークションで売り買いされているところを」
レイジ、雪野、萩原たち第一期の主人公たちは真剣な顔になっとうなずく。

「僕は人間が正しいとは考えていない。ただ、醜い姿が全てとも思っていないけど・・・。だから、自我に目覚めた僕は世界を破滅させようなんて考えていない。もっとも、このまま人間が醜態をさらし続ければ、僕の怒りに触れないとも限らないけど」

「まあ、譲ちゃんの意見もごもっともだな」
そう口を開いたのはSさんだ。子供たちを守るように僕の前に出てくる。というか、僕は男なんだが。

「この惨状も、人というものの愚かさが生み出しちゃったもんだ。結局、人間が全てにおいて秀でてる。正しいなんて思うのは、それだけで罪なことなんだろうな」

「分かります。どの時代も、そう考える貪欲な人間が権力を暴走させてきた」

「けど、こんな惨状を生み出しちゃったドラゴンドライブというゲームだが、俺はこれに光りも見た。あの嬉しそうに遊ぶ子供たちの顔はこの荒んだ世の中を変えていってくれそうだな」

俺は、このゲームを真に子供たちが純粹に楽しめる、交流の場として復活させようと思う。こんな事件を起こしたんだ。何年かかる

かは分かん。だが……」

「まあ、それも一つの答えでしょう。僕は応援しますよ」

「それで、お前はこれからどうするんだ？」

強面の、ゲームシヨップ・コイズミ店長さんが僕に聞く。何か少しづつ信用はされているようだ。

「僕も一応ドラゴンですから。裏球で過ごそうと思っています。しばらくは観光でもします」

四神龍の祠には絶対に行きたいね。

「そうか……」

店長さんはそれだけ聞くと去っていった。子供たちに危害を加えさえないければ、後はどうでもいいだろう。ここにいる大人たちはそんな人ばかりだ。

そういえば、完全復活していなかった元龍が裏球と地球を行き来する描写があったけど、僕にも出来るのだろうか……。やってみる価値はあるかもしれない。

僕は、ドラゴンたちと最後の別れをしているレイジ君たちから離れ、指先に意識を集中し、そっと宙を撫でる。

それだけで指は空を裂き、その向こうには広大な自然が広がっている。

……何だか結構簡単に出来るみたいだ。これでジゲンジョーカが力を使い果たす心配も無いわけか。

ああ。Sさんから選別としてblankカードを貰っておこう。あれがあれば、裏球でドラゴンを味方に付けられるかもしれない。しかも、カードに出来たら何かと便利だし。

そして別れの時、レイジ君などは涙と鼻水を流して別れを惜んでいるが、氷室君などはドライだね。カープスもそれを気に入っている節がある。

「じゃあ。裏球へのゲートを開くわ」

メグルさんがジゲンジョーカの前で言う。

「あ、ちよつと待ってください」

「?何?」

「この数のドラゴンを裏球へ渡すのはジゲンジョーカには辛いでしょう。僕がやります」

「え?そんな事出来るの?」

「さつき試してみました、大丈夫なようです」

僕は先程のように、今度は腕を振り上げて大きな割れ目を作る。

「ほらね」

何か、皆この光景を見て驚いている。

「じゃあ皆さん。縁があつたらまた会いましょう。皆さんなら、裏球に何時でもいらしてください。歓迎しますよ」

別に裏球は僕のものでもないし、こんなこと言うのはおかしいのだが、何だか龍の頂点として言うておかなければならないと思つたのだ。

「ああ、それと、僕は男ですから」

背後から驚愕が聞こえる中、僕は龍たちを引き連れて裏球をへ渡つた。

プロローグ (路線変更に基づきちょっと変更) (後書き)

。この小説の更新予定は特にありません。他に執筆中なので……
でもまたこうして気まぐれに書くかもしれません。

プロローグ2 四神龍（前書き）

この設定に予想以上に乗ってきたので続きを投稿します。行き当たりばったりです。

漫画に出てくる元龍は、オフィシャルカードゲームの真龍・未覚醒形態と同一のデザインということを書いてから知りました。知っていた人はごめんなさい。

この小説の主人公はカードの真龍・未覚醒形態の黒く、青い線が入った部分を覚醒版真龍の宇宙のようなデザインにしたものです。

プロローグ2 四神龍

裏球へ渡った僕とドラゴンたちはその場で別れた。

ジゲンジョーカとセンコークーラは元いたまちへ戻っていき、サ
ンダーボルトやカノープスはもとより団体行動をする性格ではない。
カンパーとゴーラオー、そしてハヤテスラッシュはしばらく一緒に
行動するみたいだ。ライコーオーはライライコクーンと去っていつ
た。

そして僕だが、まずはこの世界との繋がりを断ち切りたい。

つまるところ、ドラゴンたちを完全に具現化させ、ドラゴンたち
が消えても僕が消えないようにしたいのだ。逆も然りだが。

まあ、これは世界とつながっている部分を切ったら簡単に出来た。
これで、人間が自ら世界の滅びをもたらしても、僕は救わない。未
来は完全に今生きる者達に托されたということだ。

さて、裏球に来る前から決めていた四神龍の祠の訪問だが・・・
体何処にあるんだろうな。確かオババ様が最初から知ってたんだっ
け？だがオババ様はもう故人だ。

まあ、この世界でも人が完全に踏み入ってなく、なおかつ過剰に
広い聖域なんてそんなに無いだろうから、まずは街に出て情報収集
かな。

情報収集によって、四神龍の祠があるような箇所を五ヶ所まで絞り込んで、後はしらみつぶしに調べ、四ヶ所目で見つけた。

虚数空間がだだっ広いため、あの次元を超える力は転移としては使えない。しかし僕の移動速度はかなりのもの・・というか、それも規格外なのだ。すぐに終わった。

そして、今僕は四神龍の祠の前にいる。

「あー。見事に壊れてるな」

漫画で既に分かっていたことだが、グチャグチャだ。地面は抉れ、そこかしこに石化した四神龍の残骸が転がっている。

ここが真龍大戦の、激戦区の一つと思うと、感慨深いものである。僕は足元にある四神龍の残骸を拾い上げる。そこで、フツと何かを感じた。

四神龍の残骸から、かすかだが力を感じたのだ。

もしかして、こんな状態になっても四神龍は生きているのか？確かに第一期で真龍は最後まで死なず、再び神龍石に封印されただけだった。彼らも神と言われたドラゴンたちだ。石になった程度では死なないのかもしれない。

そう思った僕は四神龍たちの残骸を拾い集めた。

上手く治ったらブランクカードで契約しよう。

真龍と元龍と融合したことによるチートのせいか、三ヶ月で作業は終わった。僕の目の前には石造と化した四神龍が在る。

やはり、いくらかの力を放っている。どう復活させればいいのかはわからないが、まあ、何も考えずに力を注いでみようと思う。

僕が手の平を向けて力を送ると四神龍の身体が発光を始める。

そしてだんだんともとの色を取り戻し、各部が少しずつ動き始めた。そして……。

「な！？何だっつてんだこれは！！祠は？神龍石はどうなった！？」
ルビーンズイーゲルが四神龍の祠の惨状と神龍石が無くなっていることに驚く。

というか、石になっっている間も四神龍は意識があったのか？流石は神といわれるだけあるな。肉体がどんな状態になるうとこうして復活できているのだから。僕が干渉しなくても、何万年と時間をかければ復活は可能だったろう。

「落着くんだルビーン。まだ裏球は滅んでいない。確かに神龍石はなくなっているが、まだ時間があるということだ」

今度はパールズイーゲル。こいつらは全員じゃべれるのだろうか。「そうですね。時間があるのなら、よく考えて行動するのが最善です」

型にはめた話し方をするのはオパールズイーゲル。

「……………」

ザファイアズイーゲルは寡黙なようだ。

というか、真龍を取り込んだ僕がここにいるというのに、気づかないのだろうか。

「あー。ちよつといいかな」

とりあえず、話しかけてみる。何を聞いてもこっちに気付いてくれないことにはね。

「っ！！貴様は真龍！何故こんなところに！……いや、貴様は本当に真龍か！？」

どうも、このパルレズイーゲルがリーダー格のようだ。一步前に出て言う。

「なんていうかね、僕は確かに真龍だけど、それだけじゃない。地球においての真龍の役割を持つ元龍とも融合している。まあ、君たちが死んでる間に状況が変わったのさ」

「何……？」

「君たちは真龍についてどう思っているのかな？」

「それは……破壊をもたらす悪しき存在だと……」

「もうそれがそもその間違いだよ。破壊するものが悪しき存在？何とも矮小な二元論だ。そして真龍が何かを破壊しようという意思で行動していたとでも？」

「……何が言いたい……」

「真龍とは一つのシステムということさ。破壊とは生物にとって必要なものであると同時に、どうしようもなくなつた生態系をまったくさらな状態に戻す役割がある。真龍とはまさにそれだ。彼に意思はなく、ただの裏球の常識、自然。そうあり続けた。」

だが、もしその彼に意思が芽生えたなら？ただ目覚めるとともに破壊をもたらす存在ではもうない。

僕は、まだこの世界は破壊するのに早いと判断する」

そう。僕はSさんやレイジ君たちになら賭けてみたい。僕は真龍であり元龍。破壊を、終焉をもたらす存在ではあるが、それは何彼かまわずというものであつてはならない。

なぜなら、単語の上には儀も悪もない。「家族」「愛」それがいつ何時も幸せのみを与えてくれるものでないように。

「では、この世界は……」

「まだ滅ばないよ。これからどうなるかは・・・この世界しだいだがね」

僕は、醜いものを燃やすことに戸惑いはしない。それは、僕が真龍でも、元龍でも、人間であつても同じことだ。

僕は元人間だが、力を手に入れた。僕の心のまま、嘆く者の救いでありたい。人という存在の断罪者でありたい。

「まあ、今はそんなことどうでもいいんだ。僕は君たちを蘇らせた。本来なら君たちが生き返るのはあと数万年後になっていたろうけど。それにはもちろん目的があつてね」

「それは何だ・・・？」

「君たちに僕の遣いになつてもらおうと思つてね。人間っぽく言うとパートナードラゴンつてところかな」

「テメエ！あたしたちをなめてんのか！！」

ルビーンズイーゲルが僕の目の前に進み出て言う。

「そんなことはない。君たちが有能だと思つからさ」

「そ・・・そうか？へへっ！！照れるなあ・・・じゃない

！誰がテメエの遣いなんかになるかよ！！」

「少し、待つてください。ルビーン。話を聞いてみる価値はあります。何故なら、彼女が私たちを殺すことは簡単なのです。何故、遣い・・・パートナードラゴンにしたいと言ったのか。それを知るの重要です」

オパールズイーゲルがルビーンズイーゲルを留めた。

「ああ、それはね。そつちのほう楽しいと思つたからさ。後僕は男だから」

「え・・・？」

そんなに意外かな・・・まあ、外見はマリアだからね。

「ま、まあいいです。理由の詳細を話してくれますか？」

「僕は、何もかも破壊すればいいとは思つていない。嘆く者にとつては救いでありたいと思うし、醜い者にとつては悪魔でありたい。そう思っているよ。だけど、理解者というのは必要だよ。特に僕の

様な人種にとつてはね。

僕は、弱い。悠久の時間の果てに今の心が変わってしまったのが怖いのだ。」

僕は狂っている。人であった時から、生まれて来る世界が違うことが分かっていった。人が数多求めるものを僕は求めず、人が忌避するものを求めた。

「まあ、それにさつきも言ったとおり、パートナードラゴンを連れて旅に出たりとか楽しそうだなと思って」

「なるほど。貴方という人格が少し見えてきた気がします。貴方になれば私たちの力を託してもいい。少なくとも私はそう思います」

「あたしは納得なんかしねーぞ！こんな弱そうなやつにつけるかってんだ！」

「ルビンン・彼は私たちより遙かに強いですよ？」

「うっせえ！そんなことは分かかってんだよ！」

「言っていることがメチャクチャです……」

軽くいがみ合ってるだけだとは思っただけど、巨体のせいで地面が揺れている。まあ、こんなところには誰もこないだろうし、いいんだけど。

「じゃあどうすれば認めてくれるのかな」

僕はそうルビンズイーゲルに聞いてみる。

「あたしと勝負だ！負けたらパートナードラゴンでも何でもなっ

てやらあー!!」

「む。それを言われると、私もただ何もせずに契約するのは主義に反しますね」

で、それを聞いた四神龍の全員がパートナードラゴンになるのはいいが、私たちにも誇りがあるということ、結局のところ、僕対

四神龍の構図が出来上がったわけだけど……。

正直人間状態の僕はエネルギー無限吸収と物質透過が使えない。普通にダメージはあるし、肉体は碎ける。使おうとするなら龍の体を限定的にでも顕現させることが必要（人の形をとりながらも真龍と同じ、宇宙のような色になる）だが、あれはチートすぎるので出来ることなら使わずに勝ちたいね。

もっとも、この状態でも決して死ぬことはなく、肉体の欠損なんてあってないようなものなだけだ。

それに加えてこの身体でも「力」の行使には何の影響も無い。拳げるとするならあくまで人間の体（を模したもの）なので、質量を生かした攻撃はできないというところか。何百トンとありそうな四神龍たちに、たかだか四十五キロほどの僕が何をしようと思駄だ。天文学的な速度でぶつからない限り。

「さあ！いくぜ！」

四匹は、ザフィーアズイーゲルとルビーンズイーゲルが前衛、パールズイーゲルが後衛、オパールズイーゲルがその間という隊列を組み、前屈みになって構えている。

「いつでも」

人間の状態で戦うとき、気をつけなければならないのは肉体強度だ。

龍の状態のときならば、この世界のどの生物よりも肉体の強度は素で上だろう。しかし、今の僕はあくまで人間。ドラゴンとぶつかったら当然だが僕は木っ端微塵だ。

だからこそその強化である。真龍と元龍のコアから無限に生み出され続ける力を身体中にいきわたらせ、全身を強化する。

それに加え、「甲」の能力で四肢の外殻……人間なので皮なのだが、その結合力を強化する。この工程で肉体が硬くなるとか言うことはないが、それでも細胞一つ一つの結合力が強まるというのはそれだけ壊れにくい身体になるということである。

「だあああああ！！！」

始めに突っ込んできたのは、やはりと言うかルビーンズイーゲル。僕めがけて右足を振りかぶる。

移動速度は速かったが、攻撃は予備動作が大きかったため、余裕を持って避ける。だが、避けた先に迫る閃光。オパールズイーゲルの口から放たれたそれは、細い光線だというのに恐ろしい威力を内包していることが分かる。が……。

僕は右手を光線の方に突き出す。

オパールズイーゲルの光線は僕の眼の前にうまれた、同心円状の光の壁に阻まれる。波紋の様に、連続して中心から外側に消えていくその結界は、高圧縮されたオパールズイーゲルの攻撃にもびくともしない。

僕は続いて「雷」を放つ。雷撃を選択したのは単純に速度が速いからだ。威力的には同じ量の力を使ってもまだ上のもはあるが、まだお互い手の内をさらしきっていない状態では、この攻撃が最善だろう。まあ、真龍、または元龍の攻撃の中で一番破壊力の高い攻撃は、「全」属性のイリュミネーダ（さつき考えた）を除けば攻撃力に定評のある光属性の魔弾による蹂躞なのだが。

僕の攻撃は読まれていたのだろう。ザファイアズイーゲルが前に出てきて六角形の水晶のような障壁で防いだ。

次の瞬間、僕の左手側から迫る閃光。先程のオパールズイーゲルの光線と同じだが、オパールズイーゲルはザファイアズイーゲルの結界の向こうにいるはず……。

僕は迫る光線を身体をそらすことで回避し、四神龍の方を見るが、そこにオパールズイーゲルはいない。

いくらなんでも四神龍とはいえ、空間転移なんてできない筈だ。

四神龍の力は、作中ではあまり語られていなかったからな……しっ

かり見きわめる必要がありそうだ。

僕の雷撃がオパールズイーゲルの光線により終わると、残った四神龍たちは四散していく。僕を囲むつもりなのだろう。

僕は次に「風」を選択する。本当は「炎」が良かったのだが、これは殺し合いではないし（殺してしまつては本末転倒でもある）、周りが森なので配慮もしている。

僕はその場で一回転し、宙を両手でなぎ払う。

それだけで幾つもの竜巻が発生し、空気の刃が四神龍めがけて飛んでいく。

肉体的なアドバンテージのあるザファイアズイーゲルを除けば体制を維持できるドラゴンは居なかった。先ほどまで姿を消していたオパールズイーゲルも乱れ狂う風の脅威に巻き上げられ、その姿をさらしている。

僕はここでザファイアズイーゲルとの一騎打ちという得難い機会を得たことになる。僕はザファイアズイーゲルが放つ光弾を回避しながら接近する。

ザファイアズイーゲルの放つ弾丸はオパールズイーゲルのそれほど鋭くはない。本来、このような攻撃をするタイプではないのだろう。強い肉体と、強固な障壁によって仲間を守る。おそらくそれが四神龍の中のザファイアズイーゲルの役割なのだ。

だから容易に接近を許す。

「オオオオオオン!!!」

ザファイアズイーゲルは咆哮し、障壁を展開する。六角形が龍の鱗の如く連なつた、全身を囲む球の障壁だ。

おそらく、あの障壁に属性はない。「甲」のドラゴンの特徴は肉体の強度の高さもしくは、身体どこかに刃物を持つドラゴンはその鋭さにある。防御が基本になる属性という都合上、強固な障壁を

展開するのに特化したものも多いが、それはあくまでそのドラゴン種別の技能もしくは生態なのだ。

障壁、というものには当然内と外を遮断するという目的があり、「炎」「雷」「風」の様な、質量に乏しい単純エネルギー攻撃は相性が悪い。

必然、あれを打ち破るには干涉力の強い「地」「水」、次点で物理、エネルギーの両方の威力に優れる「光」「闇」。

僕はセオリー通り「地」で僕の周りにダイヤでできた刃を形成する。

「地」という属性で重要な点は、質量を生み出すことができるという点だ。何も地属性のドラゴンたちは攻撃の度に身を削っているわけではない。体力を消費し、自らの異能によって質量を生み出しているのだ。まあ、大地そのものを使った技も多いのはあるが。

僕はダイヤでできた刃を投げナイフの要領で投擲する。

幾本ものダイヤ刀は回転しながら飛んでいき、ザフィーアズィーゲルの障壁に深々と突き刺さり、一部は外殻を裂く。

「っ！・・・」

戦いに対する矜持ゆえか、ザフィーアズィーゲルはみつともなくわめきはしない。それどころか一層こちらをきつく睨み、傷を隠して攻撃姿勢をとる。

だが、ダメージによって緩慢になった動作はあまりにも遅かった。

僕の放った水弾はよるめくザフィーアズィーゲルの四肢に命中し、側頭部に放たれたものが意識を奪った。

巨体が倒れ、地が揺れる。しばらくは起き上がることもないだろう。

「てめエー！！！」

気がつくのと、ルビーンズィーゲルが迫っていた。帯電した爪を僕

へ振り下ろす。

別に避けてもいいのだが、一人隊列から外れ、単騎で突貫してきた彼女？を見逃すほど僕は耄碌しているわけじゃない。ルビーンズイーゲルの攻撃は、早い为重さが（他に比べると）ないわけだし・・・受け流して反撃だ。

迫る前足の内側に入り込んで回転を伴いながら蹴りでルビーンズイーゲルの一撃を受け流し、顔面へ「光」属性の基本であるレーザーを放つ。

攻撃を受け流されたことよって体勢を崩したルビーンズイーゲルがこれから逃れる術はなく、高圧縮された「光」の波動に顎を打ち抜かれ、その場に崩れた。

さて、あと二体なのだが、あの二体はやりにくそうだ。どちらも冷静に攻めてくるタイプのようだし、オパールズイーゲルはたぶん幻覚を操っている。それにあの高圧縮の光線もある。

パルレズイーゲルは・・・始めの隊列が後ろだったことから後方支援が他なのは間違いないが、回復技とか使えるのなら倒した二体を復帰させられる前に倒したい。

お互いの間に流れる緊張感で空気がピリピリ痛い。ここにいる全員が全員、かまえを崩さず、微動だにしない。

そこで僕に湧いてきた感情は歓喜だった。

「ク・・・クククククク」

思わず口から息が漏れる。

「・・・何がうれしい・・・」

僕の痴態に目ざとく反応したのはパルレズイーゲル。おそらく堅物なのだろう。

「いや、ただ単に思い出してただけさ・・・過ぎたことをね。あの時も僕は同じ感覚である人物と相對していた」

緊張で心が凍りつきそうなのに、なぜだか熱い。そんな感覚。

「まあ、つまらんことさ。忘れてくれ」

僕は深呼吸をし、崩れた構えを整える。そしてまっすぐに二匹のドラゴンを見つめる。

「っつ！！！」

オパールズイーゲルとパールズイーゲルはビクツと身体を震わせ、急に挙動不審になる。何故だ・・。

その後、妙に戦闘力のダウンした二体に即座に勝ち、契約の話を持ち出すと、「是非！そうしましょう！」「そうするべきだ！」とオパールズイーゲルとパールズイーゲルがやけにテンション高く主張し、ザファイアズイーゲルとルビーンズイーゲルも問題ないということで、僕は何もかかれていない「ブランクカード」を取り出し、四体にそれぞれ向けた。

すると四神龍はそれぞれ、赤、青、白、黒の光を放ち、ブランクカードに吸い込まれた。

ブランクカードには絵柄が浮かびあがる。

「雷」：ルビーンズイーゲル

得意技：雷装撃、鳴雷、縛雷瘡

「甲」：ザファイアズイーゲル

得意技：水晶陣、水晶殺

「風」：パールズイーゲル

得意技：常勝の理論、癒し涼風、双翼嵐舞

「闇」：オパールズイーゲル
得意技：闇侵食、ドラゴンメーザー

オフィシャルカードゲームのようにレベルとかアタックポイントとかパワーとかは浮かんていないが、四枚のカード全てにD・Master ルシア と刻まれている。

とりあえず、召喚してみることにする。

僕は四枚のカードを放り投げる。

カードは光を放ち始め、龍の形となった。

ズズウウウン！！

もう何度目かの地響きを起こし、再び四神龍が顕現する。でもこの巨体は何とかならないかな。これじゃ目立って目立ってしようがない。

「あー、っと、もう少し小さくなれないかな？」

そう言つと四神龍たちは光を放ち始め、四、五十メートルあるんじゃないかという巨体は十メートル弱くらいになった。

「うん。あらためてよろしくね」

「ココココはい。(ああ！)(・・・)(コク)(「「「「」」」」」

とりあえず挨拶をすませた。でも僕は・・・ドラゴンに乗って見たかったんだ！！

「じゃあ、こんな大所帯で移動することもないし、一人だけ残つてもらおうかな」

その僕の言葉に四神龍たち・・・もう相棒といつても過言じゃないんだし皆でいいか。皆はピクツと肩を震わせた。

「で！では！私が！！」

オパールズイーゲルがいち早く翼を振って自己主張する。

「な！ずりいぞ！あたしだって昔からマスターを乗せて飛んでみ

たいと思ってたんだ！」

「いや、ここはまとめ役である私が一番に……」

「……」

ザフィーアズイーゲルは首を横に振っている。これも自己主張なのだろうか。

それにしても、四神龍は全員女性人格の気がするな。あまり関係ないとは思っけど。

ついにはいがみ合いをはじめ、收拾がつかなくなってくる。止めるしかないか。

「まあ今日は早い者勝ちってことでオパールズイーゲルに残ってもらおうよ」

「……なっ……!」

「待ってください主!あ」

收拾は結局ついていないが、いつまでもここに在るわけにもいかないの、オパールズイーゲルをのぞいた三体をさっさとカードに戻し、立ち去ることにした。

そのあと、自己紹介をしていないことに気づいて再度呼び出すことになるのだが。

プロローグ2 四神龍（後書き）

四神龍に関しては情報が少ないので完全自己解釈解決になります

前話（前書き）

長らく放置しました。不徳の致すところでは。

前話

今、世界はテロの炎に焼かれている。

政治家たちの住む都会には焼夷弾が落ちて、逃げようものならハイジャックが起き、別の国の主要都市に墜落。

国を動かす政治家が死に、国防を行う兵士たちが死に、一般市民などどうでもよくなるくらいに死んで、それでも国際テロ集団、「嘆きの薔薇」は止まらない。

彼らの幹部は皆狂っていた。もつともそれは一般人の基準で、彼らには彼らなりの貫くべき意思と正義があるのだが。

「嘆きの薔薇」の活動は二十一世紀が始まると同時に水面下で始まっていた。

その頃の「嘆きの薔薇」はインターネットのセキュリティの上で孤立したサイトで、独房からあるハッカーが仲間に指示を出して立ち上げたらしい。

当時から世界の世論に対するアンチテーゼであり、創始者のハッカーが日本人だったためか特に日本人というものの移り変わりにケチをつける、まあ当時は学校裏サイトくらいのもだったらしい。

だが、ハッカーがそのサイトに集まり始めるとその状況が変わった。彼らハッカーは世間からつまみだされた人間が多い。もちろんそうでない人間もいたが、そういう人間はそのサイトに興味を示すことなく立ち去るのだった。

何はともあれ、人が集まるということはそれだけできることが増えるということである。彼らは手始めに日本政府にサイバーテロを計画した。

日本政府にとって不運だったのは、彼らのメンバーのうちに自衛隊の高官が居たということだろう。

その高官は日本政府、ひいては政治家たちに絶望していた。彼は正義を貫いて一生を生きようと入隊したのだ。順調に昇進を重ね、防衛庁の職員たち、そして日本を動かす人材たちと交流を持つに至っては、彼の憤りは自然なものだったのだらう。

「嘆きの薔薇」のサイバーテロを期に彼は言った。「今の日本政府は存在する意味があるのか？」と。

会合の場に集まっていた高官たちは皆一斉に渋い顔をした。その頃の自衛隊の高官たちは生真面目な者半分、利権に固執する者半分のいったところだった。

普段は意見の合わない彼らだが、この時に限っては同じ意見だった。すなわち、「国会議事堂を占拠しよう」。

まあ、この結論に至ったのは、「嘆きの薔薇」に所属する高官が人心掌握に長けていたということもあつてのことなのだが。

そしてすぐに武装した自衛官が国会議事堂を埋め尽くすことになる。

しかし、日本政府も黙っているわけではない。自衛隊に対し、警察を投入。近代兵器を使った戦争に突入していく。

アメリカなどの先進国は争いを止めようと群を派遣しようとしたが、そこでも「嘆きの薔薇」のテロが起こる。そちらではどうやら将軍が「嘆きの薔薇」のハッカーを雇って起こしたらしい。

自然、日本に軍を割く余裕・・・というか、軍の半分が反旗を翻したわけで、全戦力を自国の治安維持に裂いても手が回らないという状況になった。

日本とアメリカ、先進国の中でも有数の技術力を持つ国でほぼ同時期にクーデターが起きたという事実は、他の諸国にも影響を及ぼした。市民の政府への不満が爆発し、中には自爆テロをしかける市民もいたんだとか。

そして日本とアメリカで起きたクーデターの首謀者、自衛隊の高官と将軍は言う。

「われわれは「嘆きの薔薇」。世界を真実の姿に戻す正義の従僕である」

崩壊した現代のモラルでは彼らを止められない。各国政府を中心とした国連側。ある国では軍、またある国では市民、混迷化した構成の「嘆きの薔薇」側。

真つ二つに分かれ、対立する勢力の戦争は、決して止まらない。

僕は日本の自衛隊側、つまり「嘆きの薔薇」側の兵士だ。歳は十四。少し若い、今の日本では珍しくない役職。

僕が「嘆きの薔薇」の活動に参加し始めたのは十二歳のときだ。理由は「死なないうため」だった。

戦争というのもちろん兵士も死ぬが、一般市民への被害も甚大、いやむしろ一般市民のほうに大きなダメージがいく。そして一般市民は現実に抗う力を持たない。僕はそうして理不尽に踏み躪られて死ぬのを良しとしなかった。

僕の現在の地位は一等陸士。第十二大隊所属、特殊工作部隊小隊長。小隊長といっても、今までの自衛隊に少なかった新設の特殊工作班で、僕の部隊の隊員は全員二十歳以下の使い捨てであることは

間違いない。

まあ、部隊長がいい人なので上の意志に反して生きているといったところか。

警察側、自衛隊側の両方が拠点を各地に築いてからは、大規模な戦闘も減ったが、小規模の戦闘は日常茶飯事だ。その度に戦闘に借り出されるが、何もできずに逃げ惑って、その果てに殺されている一般人を見ると、戦ってて良かったと思う。良かったとは思いますが、自分が壊れているのも理解している。

殺しを禁忌だと思うことはないが、戦い始めると、心は冷めたまま頭は興奮状態という一種の狂気を宿す。他の人がどうなのかは知らないが、僕はそうだ。目の前の敵を、どうやったら効率よく殺せ、自分は生き残れるか。行動するに至っては余計なことを考えず、計画したことをどれだけ早く正確に行うか。それだけだ。

それは生物としては正しい。だが人間としてはおかしい。いや、寧ろ生死の危機を知らず、愛だ平和だ絆だを語っている人間がおかしい。まあ、そんな夢想家の人間だからこの戦争は終わらないだけだ。

つまるところ、自分は高潔、正しい。とか言いながら自らを正当化、そして宙に浮いた罪は愛や正義を語らない、真の意味で真面目な人間に押し付ける。「愛や家族を語っていない」とかそんな理由で。

彼らは、その愛や家族が理不尽に人を踏み躪ることを理解していない。愛、家族。そんな言葉がただで掛け値なしにすばらしいと、愚かしい妄想を語る。

愛？金で買える。家族？そんな欲望のままに生きてりやできる。そんなものは何一つ、人の素晴らしさを証明するものになりはしない。

美辞麗句は人の欲だ。自分が高潔であることを証明するために言

う誤魔化しだ。日常から誤魔化しを言い続ける生物（人間）など信用に値しない。言葉を当てはめるなら、「汚物」が適当。

警察側は、そんな醜さの極まった人間ばかりだから、何も考えずに殺せる。

今日も僕は小規模戦闘を終え、宿舎に帰ってくる。軽く汗を流して、石鹸やシャンプーを部屋に置いて大部屋に移動。僕の隊の隊員の一人が、後で皆で集まるうと言ったからだ。

「いやー、今日も俺たち、生きてたな」

そんな自虐とも取れることを言うのは鈴木敬二。短く刈り込んだ髪はどこか野球部を連想させる。十八歳。

「それはウチの小隊長が優秀なおかげだな」

眼鏡をかけて、間抜け顔なのにどこか融通が利きそうにないこの男は荒川一、二十歳。

「ああ、それは感謝してるぜ！」

鈴木が僕に言う。

「うん。小説読んでいい？」

僕は二人をみて言う。二人も僕が時間があれば鍛えているか、小説読んでいるかというのは知っているので、了承する。ああ、部屋にいるときはゲームもするな。特に禁止されているわけでもないし。

「Star Ocean3」はよくやる。

僕は「レンタルマガ」と言う小説をバッグから取り出し、栞を挟んであるページを開く。鈴木と荒川は気が会うようで、持ち寄ったお菓子を開いて談笑を始める。

と背中になんか被さった。視線が小説から外れる。

「うーんっ！やっぱ可愛い！」

鎖骨のあたりに感じるやわらかい感触。鼻をくすぐる匂い。僕の視界に入ってくる長い髪。どうやら最後の隊員が来たみたいだ。

彼女は山本晴美。数ヶ月前ウチの隊に来た。十七歳。やけに僕のこと気が入っており、時折こうして大胆な、もとい誘うような行動に出る。

だが、気を許してはいけないと思う。僕が部隊長と何を話していたのかとか、逐一聞いてくるのだ。彼女はスパイの可能性もある。無論、部隊長の耳に入れてある。様子を見るとのことだ。

「晴美さん。そう言うことは止めてっっていうつも言ってるでしょう？」

「何で？ 君も嬉しいよね？」

「そう言うのとは関係なく、規律が乱れます」

「そんな事関係ないわ！！そして 君は今日こそ私を襲うのよ！！」

大部屋には僕たちのほかにも集まっている小隊が居るのだが、そんなものは関係ないと、山本晴美は言う。

でも実際に襲われたらどうするつもりなんだろうか。毒でも使って僕を殺すのか？それとも成されるがままなのか？

一応、彼女が毒や爆発物の類を所持していないことは、入隊の時に確認済み。そして大した情報も与えていない。

「本当、どうなるんだろうね……」

そう呟いて、小説に再度、目をおろした。

その夜のことである。

ペシペシ

と何かが僕の頬を叩く。

「う・うん？」

「あ、起きた！？ 君」

目の前には山本晴美がいた。焦っているようで、妙にソワソワして余裕がない。

「何かようですか？」

僕は周りを見回して言う。

「君。私とここから逃げて！」

「何ですか？」

僕はそう聞いたのだが、「ああああ、早くしないと、でででもでも、時間が・ああああ」と、テンパっていて要領を得ない。

とりあえず晴美さんを落ち着けて話しを聞く。

「もうすぐ、ここに核爆弾が落ちるわ」

僕はそれを聞いても心が動かなかった。

人はいつか死ぬと達観しているわけじゃない。法という理不尽に殺されるわけじゃなく、戦争の中で、戦いの中で死ぬのなら、それは立派な原初のルールに則っている。いい死に様ではないのだろうが、家族に囲まれて大往生なんてものよりはいい。

「それで、何時に落ちるんですか？」

「二時・・・」

僕は枕元の時計を見る。

「あと十五分。逃げられませんね。ここには核シエルターなんてないですし」

「・・・」

晴美さんはしょぼんと落ち込んでいます。

「何で、そんなに落ち着いてるの？」

「別に、こういう死に方なら納得できるだけです。人の世に生きて来て、納得できることなんて何一つなかった。人の意志とか、法とか、醜すぎたから。でも、こうして法や美辞麗句の通じない世界

になつて、ようやく僕はこの世界に意味を見出せた。人は嘆き、憎しみを持つ。それが通じる世界になつた。

僕は人が憎かつた。だけどいつも人は、人が人の害になるのだということを理解しようとしなさい。こうして逃げようのない世界にならないなかぎりは。嘆きや怒りを否定されるのは、テストでいい点を取つて褒められなかつたときより苦しかつた」

そう。僕は否定され続けた。子供という立場は弱い。親がどうしようもないクズであつたり、教師が現実を理解していないゴミだつたとき、子供は容易く傷つく。

そしてそういう大人こそ言うのだ。「愛」「正義」「道徳」「家族」「平和」。子供を踏み台にして自分が高潔であるということを証明する。

「君は・・・強いね」

「初めていわれた」

晴美さんは僕の隣に座る。キシ・・・とベッドが揺れる。

「ねえ、お願いがあるの。言つていい？」

「どうぞ」

「私を抱いて」

「なん「何でとか聞かないで」」

「君にはふざけてた様に映つたのかもしれないけど、私は本気だつたのよ？それに、私みたいないい女を処女のまま死なせる気？」

僕は彼女の望みを叶えるべく彼女を押し倒し、そこでふと、自分の望みはなんだつたんだろうと考えた。

特に思いつきはしなかつたが、僕が彼女の望みを満たせるのならそれはそれで意味のあることなんじゃないかと、そう思えた。彼女は、この世界に珍しい、「いい人」だから。

その日、自衛隊の駐屯地の一つに核ミサイルが落ちた。

それは日本政府がアメリカ軍から譲り受けたものを放ったものなのだが、奇しくも核戦争の引き金を引いたのは非核三原則を謳う日本だったと。そういう皮肉な話だ。

ポケヨル第一話 八祖の禍家（前書き）

ボクヨル第一話 八祖の禍家

四神龍と裏球を巡り、たまに地球に戻ってはSさんにRi-ONのデータベースにないドラゴンの情報を伝えたり、ドラゴンドライブの製作にかかわったりしていた。

そこでふと思いついたことなのだが、僕は地球と裏球以外の世界には行けないのだろうか？

僕が裏球と地球を渡る時に通る空間を、仮に虚数空間とする。理論上無限に広がる空間となるわけだが、それを使って裏球と地球を行き来できることから、実空間と繋がっていると仮定したとき、無限の広がりを持つという要素に限定がつくことになる。

それに加え、あの空間には座標がちゃんとある。そうでなければ、地球へ狙っていくことはできまい。

座標があり、その広がりにも限りがある。では、限界いっぱいまで進み、突きぬけた場合はどうなるのだろうか？

そもそも突き抜けることなどできないのかもしれない。だが、その先には新たな世界が広がっているのかもしれない。非常に気になる。なまじ世界を渡っているだけに。

と、いうことで四神龍をカードに戻し、虚数空間を飛行中だ。四神龍じゃこの空間の負荷に耐えられない。死にはしないだろうが、ダメージはあるだろう。

僕は今、龍の姿に戻っている。裏球ではドラゴンハンターや彼らを雇うレアドラゴンの収集家たちに目をつけられないように人の姿でいたので、開放感がある。

それに、ここでなら全速で飛行が可能だ。間違っても裏球で全速飛行しようものなら、周囲を衝撃波で消し飛ばしていくだろうし。

そうして三日くらい飛んだらどうか？三日も景色が変わらないというのは正直うんざりするものがあるが、空間の端とでもいうべきところにたどり着いた。

僕はその壁に手をかける。そして一気に引き裂いた。

割と簡単に、それこそコピー紙でも破ったように虚数空間の壁が裂けた。裂け目の向こうには今までの水色とオレンジの空間ではなく、銀のグラデーションになっている。

世界が変わると虚数空間のデザインも変わるのかと、どうでもいいことを思いつつ、虚数空間から情報を吸いだして、知的生命体のある星がないか探る。すると、案外あっけなく見つけることができた。

僕は自分の仮定が間違っていたことに満足感を抱きつつ、キャッチした座標を目指す。

そして人間の姿になり、虚数空間と実空間の壁を通過した。

新しい世界の印象は、何とか普通。今、僕がいる場所は公園であり、その外には住宅街があり、遠くには背の高い建物が見える。田舎でもないが、特に都会でもない。変な形の建物があるわけでも

なく、もちろん戦争なんて起きてない。

「いつっ!!」

不意に、幼い男の子の声が響いた。

そちらを見ると、三人の・・・中学生くらいの男子の前に、小学生の男の子が尻もちをついて座っている。

「それは勇のдар！返せ！」

小学生の男の子は中学生の真ん中の、キモメンが持つゲームソフトを見て言う。

「はあ！？これは貰ったもんだぜ？つまり俺んだ」

「お前が強要したんだろっが！」

つまりはカツアゲした中学生にカツアゲされた友人のゲームソフトを取り戻そうとしているわけか。どの世も世知辛いね。

だがまあ、僕はやりたい放題というのが嫌いだ。介入するか。

そう思った時、異変に気付いた。視線がどうも低い。十歳くらいだと思ふ。あの小学生の男の子よりは大きいけど。

龍と人間の変化に慣れてないのが問題だろう。まあ、ただの人間相手じゃどんなに小さくなるうと問題ない。

僕は言い争いを続ける四人に近づく。

「さつきから聞いていれば、お前たちが悪いんだろっ？さつきとその手に持っている物を返せ」

急な乱入者に四人は面食らった様な顔になるが、ゲームソフトを持っている真ん中の中学生がすぐにニヤニヤして反論する。

「ああ！？女はひっ込んでろ！！」

女？・・・ああ、僕のことか。それにしてもこの中学生どもはさつきからキモイ。人の身体ジロジロ見やがって。

「そうだ。ぶっ殺すぞ！？俺の女になるなら許してやってもいい

「がなあ！」

右側のモヒカンが言う。中学生でモヒカンって……馬鹿？

「忠告はした」

僕はそれだけ言っただけ真ん中の中学生の鼻っ面に掌底をくらわせる。そんなに強くしてはいないが、当たった場所が場所なので、後ろに大きくのけ反り、尻もちを突く。

そして手放したゲームソフトを空中でキャッチ。そして無様に転がる中学生を見下ろす。

「てててててめえ！！やりやがったな！！てめえら！やっちまえ！！！」

自分は来ないのか。ヘタレだな。

モヒカンとスキンヘッドが向かってくる。もっとも、チンピラなんて鍛えてるわけがない。二人ともガリガリだ。迫力がない。

僕はモヒカンの顔面にジャブを入れ、膝で金的。スキンヘッドのテレフォンパンチは軽かわして、レバーを打ち抜いた後は連打で顔面をボロボロにする。スキンヘッドは鼻水と涎を撒き散らしながら倒れた。

僕は未だ無様に尻もちをついてるアホに近づく。

「く、くくく来るなあ！！！」

僕はそれを無視して腹をけり上げる。「グボ！！」と息を吐いて中学生は転がる。

そして仰向けに倒れた男の顔の横に靴を踏み下ろした。

「ひっ！！！！！」

「さっさと消えろよ……汚物ども」

僕はできるだけ低い声で言う。まあ、女みたいな声だが。

しかし一応チンピラには効いたようで、情けない声をあげて去っていった。

僕はチンピラから取り返したゲームソフトを持って小学生の男の子に近づいた。

「ほら」

そう言っただけでゲームソフトを渡す。

「う……ぐ……ず……」

すると男の子は泣きだした。口をへの字に曲げて険しい顔をしているあたり……。

「悔しいのか？」

その問いに、男の子はコクツと首肯する。

「俺……は、正し……いことをした。でも……グズ、どうにも……できなくて」

少年は止まらない涙を服の袖で拭い続ける。

「世の中なんていつもそうさ。強い者が欲を主張し、弱い者から搾取する。でも、君はそんな事実が嫌いなんだね？」

少年はまたも首肯。たぶん、ぐずっている声をできるだけ聞かれたくないんだろう。

しかししばらくして少年は語り出した。学校でイジメがあったのだと。

イジメられていたのは彼の、普段少しだけ話す程度の級友。特に親しいわけでもない。そしていじめの主犯格は街の権力者の息子で、それを知っている教師や生徒は何も言えないのだった。しかし少年はそのいじめに立ち向かうことにした。

だが、そのいじめグループは彼を袋叩きにし、これ幸いといじめ

の対象に加えたのだった。

少年に行われたのは徹底的に彼を無視するという精神的ないじめだ。少年はそれにも果敢に立ち向かった。だが、その結果待っていたのはそれまで親しくしていた級友たちからも無視されるという結果だった。特に、最初にいじめられていた者に無視されるのがきつかった。

そして今日、最初にいじめられていた級友が、ゲームショップの前で中学生からカツアゲされているところを見つけた。

そこで彼の頭の中には今までの苦痛が駆けまわったようだ。カツアゲ、それは悪いことだ。しかし、自分がそれを粛清しに出ていく意味があるのだろうか、彼もまた自分を無視した者の一人である、正義とは嫌われ者に押される烙印ではないのか。そんな考えが頭をよぎった。

しかし彼はそんな心に喝を入れ、公園に入っていく中学生たちに声をかけた。

そして今に至る・・・と。まあ何とも勧善懲悪を絵に描いた様な少年だ。普通なら、この年になるまでに膨れ上がる欲に、その尊い精神は失われる。だが、彼は彼自身が見つけた真実を見失わなかった。「それなら強くなるしかない。この世には完全な正義の悪もない、どれにも人の意思、欲が入るから・・・。それでも君が見つけたある種の真実を守りたいと願うなら、僕が鍛えてあげようか？」

「・・・いいの？」

「ああ、特にすることも決まってる。明日、学校が終わるころにここに来るといい。時間は少しずれるかもしれないが、僕もここに来ることにする。」

じゃあ、今日はもう帰るといい。ゲームソフトも勇君とやらに返すんだろっ?」

「うん……」

それだけ言っつて、少年は去っていった。

Side・アイリス・マリア・ヘルブスト

あたしはいつか訪れる「魔宴」を効率よく戦うため、世界中をまわっている。今は日本という国でを調査中だ。

この日本という国は魔乖術師の数が少なく、始めに陣取って罫を仕掛けるには都合のいい場所だろう。いかに魔宴の参加者が七名だけとはいえ、いかに七名以外のどのような形でも「八祖の禍家」の参加が認められていないとはいえ、ばれない程度にズルをするものは必ず居る。

あたしの魔乖咒は「滅」。罫を張って迎え撃つというタイプではない。無論、戦術として罫を使うときもあるが、それは攻撃を当てる隙を生み出すためであり、敵から逃げたり、敵を攪乱するという意図は、攻めのみであるあたしの魔乖咒にはそぐわない。

あたしがこの国に居つくことにはないと思うが、「闇」や「偽」などの補助系の魔乖咒の使い手たちはこの場所で陣を張ることな多いにありえる。特に「偽」なんかは「滅」にとっては鬼門だ。それに「闇」を葬り去るのは「滅」の悲願。この国を調べておくのは「滅」にとって重要である。

というのが「滅」の年寄りたちの総意だ。

不快だが、言っていることは正しい。

とりあえず今いる街の調査が終わり、ボストンバッグを下ろして一息ついているときだった。怖氣のする、圧倒的な魔力がこの街に満ちたのは。

草むらに隠れ、「それ」を監察する。

それは気だるげにチンピラたちを殴り飛ばした後、その場にいた少年の話しを聞いていた。一見、人のいい女の子のように見える男の子だが、あたしには分かる。あれは危険だ。

隠蔽されているようだが、ヒシヒシと伝わる圧倒的魔力。それは大きさは別次元で破滅を予感させる。生き物に必ずといってある、いわゆる「温度」がそれには圧倒的に欠けていた。

それから一言二言話し、黒髪の少年は去っていく。

「さて……」そう言って「それ」は振り返った。

||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||

「さて……」

『主』

腰の裏のホルスターにしまったカードから、パルレの声が直接頭に響く。

「うん……さつきから見ているのは誰かな？」

「っ！……っ！」

ガサガサ

と背後の草むらが揺れる。

そこから出てきたのは毛先がカールした金髪で、赤い眼をした少女だ。年は僕と同じか少し上くらいか。首から上をすっぱり覆えそうなほど大きな三角帽子を頭にのっけて、本を左手で広げて構えている。

「あなた、いったい何者？」

少女は低い声で言う。友好的な雰囲気ではない。僕という個体が未知であることに違いはなさそうではあるが。

僕は特に今戦いたいわけでもなし、友好的に行こうかな。

「初めまして、僕はルシア。君は？」

「……アイリス・マリア。もう一度聞いわ、あなたは何者？」

「僕が何者か。それはとても説明しづらい。抽象的でいいのなら簡単だけど、確固としたモノが僕にはない」

「何を…言っているの？」

よく見ると少女の手は震え、額からは汗が伝っている。

おそらく、僕の内包する力を感じ取っているのだろう。と、すれば、彼女も超常の力を扱う者の一人というわけだ。

「僕は自分というものを語れない。どこで生まれたとか、何をしているとか、全てが曖昧で言葉では捉えづらい。」

それはそうと、そろそろその本を下ろしてくれないかな」

あの本に僕には天地ほども及ばないとはいえ、かなりの力が収束していくのが見える。

「ふんっ、アタシがこの本を下ろして、その瞬間あなたが襲いかかってきたらどうするのよ」

あらら、完全に僕を敵と認識してるようだ。

「じゃあ僕から去ろうかな」

僕は身をひるがえす。

「なっ！！」と少女が驚いているが、歩みを止めない。そしてそのままゆっくりとその場を去った。

次の日、特に飲食の必要は僕にはないし、四神龍たちにも僕からエネルギーさえ送っていればいいのだから事実、お金は必要ないのだが、でも最低限買う物もあるかもしれないと、裏球から持ってきた宝石を少し質に入れて換金した。

そのままカード状態の四神龍たちと談笑しながら街をぶらついていたのだが、特に目につく物があるわけでもなく、有態に言えば退屈していた。

そうして街をさまよっている間にふらふらと昨日、少年と会った公園へ来てしまったのだ。でも……。

「何で君が居るのかな」

「うるさい」

公園のベンチには昨日の、金髪の少女がぶすぶすとした顔で座っていた。

『ルシア様。いいのですか？さっさと立ち去った方が…』

『そうだぜ！昨日あんなに敵意むき出しにしてたじゃねえか』

オパールとルビーンが念話で話しかけてくる。

（別にいいよ。彼女自身も僕との戦力差はわきまえてるみたいだし、品性下劣な人間にはどうやっても見えない。僕を殺せるとも思

えないし)

『それはそうですが……』

(それに、この世界の魔法なり魔術なりに通じる手掛かりなんだ。近くにいた方が面白いと思うけど?)

『……分かりました。しかし、ルシア様に何かするようであれば……』

(できるだけ手荒なことはしたくないけどね。オパールは止まる気、ないんだろ?)

『無論』

そう言つてオパールは黙った。僕は少女、アイリス・マリアの隣に腰を下ろす。

「っ!?!?!」

アイリスはビクツと肩を揺らした。

「何のつもり!?!」

アイリスは僕の方を振り向いて言う。

「あのね……その台詞を使いたいのには僕の方なの。こっちとしては何で君が僕に敵意を向けるのか分からない。僕も君が何者なのか分からなければ、どういう経緯で僕に突っかかっているのかも知らない。僕は昨日一応の説明をしたはずだけど、君の方こそ説明不足じゃないのかな」

「う……」

アイリスは僕の正論に怯む。

ふと、何かが鼻についた。僕はアイリスに近づいていく。

「な……何のつつつもりだ?」

うん。やっぱり汗臭い。服も昨日のままだし。

「君、汗臭いぞ?もしかして昨日あれからずっとここにいたのか?」

今、時期かどうかは分からないがこの一帯は中々高温多湿だ。僕

は汗なんてかかないけど、普通の人間が野外に一日中いたらこうなることは予想がつく。

一方僕の言葉を聞いたアイリスはその場で石のように硬くなった。

「ふ、ふふふふふ………」

アイリスは長い髪を揺らしながらユラリと立ち上がる。足元からは魔力が吹きあがっている。

『ルシア様!』

オパールもこの状況に反応する。

(あー。別にいいよ。昨日に比べれば全然弱いし、僕を殺そうっていう行動じゃないだろうから)

「死ね………」

そしてアイリスはふてぶてしくもベンチに座り続ける僕に拳を放った。だが。

ガンッ!!!!!!

チタン合金でも殴ったような音が公園中に響く。

「っ………」

アイリスは悶絶しながら地面を転げまわる。

僕は何とも虚しいな、と思い、空を見上げるのだった。

ようやく落ち着いてきたアイリスを座らせ、手を診ると打撲しているようだったので、公園の水飲み場の流水でよく冷やし、街をぶらぶらしていた時に見つけた薬局で湿布と包帯を買って、簡単に治療した。

包帯を巻き終えた後、「ありがと………」と言われたのはなんだか新鮮だったな。普段はあまり言われない言葉だからな。

「やっぱり、あなたも魔乖術師なのね」

唐突にわけのわからない言葉が飛び出す。まあ、おそらくこの世界での魔法使いとか魔術師みたいなものなんだろうけど、どういう集団なのか、集団として成立しているのならその構図は？分からないことだらけだ。

「魔乖術師？何……それ」

「何！？知らないの？」

「まず、僕らの立ち居地を確認した方がいいね。お互い、情報を流すのはリスクがありそうだけど」

「……そうね」

「じゃあ僕からね。僕は人から見た印象で言うと、異界の化け物でいいと思う。人じゃないよ」

「あなた……あたしを舐めているの？」

アイリスは目尻を吊り上げる。

「いや、事実だよ」

僕は語る。僕のいた龍ばかりの世界の話を。

「僕はそこで半物質の肉体を持つドラゴンだった。ある程度肉体を自由に出来るから、こうして人間の姿にも成れる。もつとも、強く意識することが必要だから、なんにでも成れるというわけじゃない。今はこれと龍の姿以外には成れない」

「ちよつと見てて」そう言っ僕は手の平を龍の状態に戻す。指は三本になって、手の平は宇宙を感じさせるデザインに。手の甲には銀色の外殻が現れ、指先は青白い鉤爪になる。

「これは……驚いたわね。じゃああなたが魔乖術師を知らないのも当然ね。では、次はあたしね。」

あたしはアイリス・マリア・ヘルブスト。この世界を裏から支配する魔乖術師、その中核たるく八祖の禍家アハト・シュレクト・フォルファレンの直系。と、言ってもアンタにはわけがわからないだろうから。どうしたものか

「とりあえず、魔術師の親戚ということでもいいのかな。で、その指導者の家柄が八つあるという解釈でいいのかな」

「厳密には魔乖術師と魔術師は別物よ。でもその認識で間違いではないわ」

この世界にもいろいろ裏があるようだ。まあ、その裏の頂点が目の前にいるわけだが。

そこで気づいた。さつきからやけに街行く人たちが僕らを見ている。理由は明快だった。

(コスプレとか思われてるんだろうな)

僕の格好は軽鎧にジャケツト、下はズボンと外套。この街どころか中世に行ってもそぐわない。そしてアイリスの格好はまんま魔法使い。

受験生なのだろう。早い時間に帰っていく女子高生が「きゃーカワイー」とか言いながら僕たちを写メで撮る。

その女子高生たちの態度に、アイリスは眼に見えてイライラしている。

「そういえばさ、アイリスはどうしてここにいたの？」

僕のその言葉に、アイリスは不気味なオーラをあげ始める。

「……………のよ」

「え？」

「荷物を取られたのよ！あなたに気を取られてるうちに！お金もパスポートも全部！！」

うわぁ……………ご愁傷様？

「まったく！日本は安全だっていうから気を抜いてたわ！何よ！コロナと変わらないじゃない！！」

アイリスはそのあとしばらく僕に愚痴をこぼし続けるのだった。

ボクヨル第一話 八祖の禍家（後書き）

予想外の「僕と彼女に降る夜」とのクロス。本当は東方とクロスさせて幽香様でも仲間にしようかと思ってたけど、いかんせん作者は東方を知らないので書けないのだった。

今回はおまけということ、僕が遊戯王タッグフォース4でよく使っていたデッキの一つを紹介します。制限リストはタッグフォース4時期で最新のものです。

タッグフォース5の制限でも構築は可能です（というか、5の初期制限は4の最新制限と同じでした）。このデッキはあくまでタッグフォース4までのカードで構築。タッグフォース5はプレイ中。全体的な流れを楽しむための、いわゆるファンデッキです。普通に次元帝にした方が勝てると思う。

デッキ名：パラレルシンクロ 合計42枚

上級モンスター 9枚

- 6 邪帝ガイウス×3
- 6 ブローバック・ドラゴン×3
- 6 エンド・オブ・アビス×1
- 5 サイバー・ドラゴン×2

下級モンスター 13枚

- 4 異次元の生還者×3
- 4 墓守の偵察者×3
- 4 ジエネクス・ニユートロン×3

- 3 ジェネクス・コントローラー×3
- 3 マシユマロン×1

魔法カード 8枚

- 次元の裂け目×2
- サイクロン×1
- 洗脳・ブレインコントロール×1
- 増援×1
- 封印の黄金櫃×2
- 闇の誘惑×1

トラップカード 12枚

- 異次元からの帰還×1
- 神の宣告×1
- 激流葬×1
- 聖なるバリア・ミラーフォース・×1
- 魔宮の賄賂×2
- マクロコスモス×3
- 闇次元の開放×3

エクストラデッキ(基本、その人その人の自由で)

- 9 レアル・ジェネクス・クロキシアン
- 8 スターダスト・ドラゴン
- 8 レッド・デーモンズ・ドラゴン
- 7 パワー・ツール・ドラゴン
- 7 ブラック・ローズ・ドラゴン
- 6 氷結界の龍 ブリューナク
- 6 ゴヨウ・ガーディアン
- 5 A・O・J カタストル
- 8 キメラテック・フォートレス・ドラゴン

除去を上級モンスターに頼っているのが不安定です。ですが、サイバー・ドラゴンや墓守の偵察者でキーカードのマクロコスモスが来なくてもある程度戦えます。マクロコスモスさえ張れば、ジエネクス・ニユートロンより終末の騎士の方が即効性はある。

マシユマロンを墓守の呪術師に換えるとレベル6のシンクロモンスターが使いやすくなり、少しながらバーン効果もあり、オススメですが、僕自身がマシユマロンに助けられる機会が多あったのでそのまま掲載します。

リアル・ジエネクス・クロキシアンが出てからは一気に楽になる。しかしタイミングは一考の余地あり。任意のタイミングで墓地のカードを除外できるカードがスペースの関係で入れられなかったのも痛いか？というところですよ。

四神龍の擬人化は・・・した方がいいんですかね？

ボクヨル第二話 ナイト（前書き）

この小説の主人公には「僕と彼女に降る夜」の原作知識はありません。

ボクヨル第二話、よろしくお願いします。

ボクヨル第二話 ナイト

教師というものは、他人に自分の知識や技能を伝える者を指す。だが、恩師というものはどういふ存在か。おそらくそれは、自分の将来を指し示してくれた存在をそういうのではないだろうか。

もちろん、僕にそういう特定の人間はいない。僕は将来を指し示されるどころか、常に自分というものの在りようを否定される、つまり、将来というものに僕は必要ないと、そう言われてきたのだから。

恩師というものに出会えた人間は幸せだ。自分で考えなくとも、他人に将来を決めてもらえる。そして自分から求めなくとも自分の意志を肯定してもらえ、将来というものに多少なりとも責任も持つてもらえるからだ。彼らは苦悩でない努力を体現できる。

なぜこんなことを考えたのか。それ目の前の少年が「正義」というものについての答えを僕に求めているからだろう。彼の懊悩に、解答という光を当てる存在。それはまさしく恩師といって差し支えない。そして、今それをするのは僕である。

もちろん、僕が恩師たりえる逸材かといわれるとそんな事はない。僕は兵士だ。軍というものは常に自軍の行動が正義に則っているものと主張する。そうしなければ心の弱い人間、まわりに正しく見られたい人間、それらについてくる大多数の人間と同じ行動をとる人間を扇動できないからだ。

この考え方において、正義はビジネスと言えるだろう。

だが少年が求めているのはそんな「汚物」ではない。彼が求めているのは「真実」。誰が不正を行っているのか、誰が嘆いているのか、誰が罪を背負うのが適当か。そういうプライスレスなものだ。もちろん、彼自身が正義を主張したいというものではない。彼の

頭の中には「誰かを助けたい」とか、「愛や家族は大切にするものだ」という言葉を口に出して、まわりからの感心をかいたという心積もりはない。

ただ、彼は不正を行った者が正等を装い、理由もなく人が傷ついていく様を見ていられない。言葉を返せば、不義理な人間は裁かれてこそ正義というところか。「誰もが幸せに」なんてことを言う人間よりよほど好感が持てる。そんな人間は所詮、何かに憤ったこともなく、自分の言いたいこと言いたいだけを他人に押し付ける、他人の過去や心のことなど何一つ勘定に入れていない、世間知らずでごうつくな人間だからだ。

彼は自分自身の心で、人は傷つき、憤り、怒りを覚えることを知った。時代が時代ならノーベル平和賞も取れる。

さてそんな少年、「清夢騎士」スガムナイト君は、自分を鍛えるべく僕のもとに来た。

といつても、僕自身は他人に物事を教えるべく教育を受けているわけでもない。教えるとするなら、今まで自分が教わってきたことを反復して、ナイト君に教えることになる。

僕の格闘術は小原国安部隊長に教わった、空手、ボクシング、柔道などのごった煮格闘技だ。ブーツキックなんてのもあったか。なぜそんなことになっているのかというと、技は教わったが、空手などにある型はちつとも教わらず（意味がないと言われた）、スパーリングと実戦で磨かれたものだからだ。

まあ、ごった煮だからこそ役に立つ場面もあった。それに、戦争が起きるまで国安部隊長は軍の格闘技の指南役だった人だ。どういう場面でどういう技が有効か、徹底的に叩き込まれた。僕だけ異様にきつかった気もするけど。

ちなみに僕の戦い方は足技を基本としている。意識したわけではなく、自然とそうなった。僕は少年兵だったため、常に体格で勝る相

手を倒さなければならなかったからだ。どこの烈蹴拳だよ（これは荒川一の感想、彼は幽幽白書好き）、というくらい足技を使う。組み立てとして掌底、ジャブ、正拳から入ることはあるが、相手に隙を見つけるや否や蹴撃。速さだけでなく、適確に急所を貫く正確さも持っている。部隊長曰く、「俺を越えた」。事前に分かっていたもかわせないレベルらしい。もっとも、部隊長は全てにおいてそうだったが。

まあ、何にしてもまずは基礎体力からだろう。彼は小学校低学年なので、中学生に体格で勝ろうというのは無理がある、人間の世界でいきなり三階級上のボクサーに立ち向かうことはできない。それでも勝とうと思ったら、技を磨くことだ。そして技を生かすには自分の身体をスムーズに動かせるよう、柔軟性としっかりした下半身を手に入れることが重要。まあこれは肉体改造のときにも意識しなければならぬが。

ナイト君は僕の目の前で仰向けに倒れている。僕と一緒に走らせたからだ。

「アンタは・・・ハア、ハア、化け物か・・・何で、俺が、十周する・・・間に、三十周も、できるんだ」

あえて言うなら種族の違いか？ナイト君は小学校低学年にしては鍛えられている。そういえば、昨日スポーツは得意と言っていたか。

「さあ？何でだろね。あ、後十分休んだら技を教えるよ。僕はスポーツドリンク買って来るからそこで休んでて」

僕がジュースを買いに行こうとすると、アイリスが後について来た。

「ねえ。何でこんなことするの？」

「こんなことって、ナイト君を鍛えることかな？」

「そうよ」

「彼の抱える問題が、僕と似ていたからかな」

彼もまた、理不尽に打ちのめされた一人だ。そして、理不尽と戦おうと思ふのなら力は必要だ。まあ、彼が僕と違うのは死なないために力を得るか、戦うために力を得るかの差だ。

「似ている？あなたには力があるのに？それも世界を左右しそうなほどの」

はい。世界を左右しそう・・・というか、します。

「もつと精神的なものだよ。僕だって初めからこんな力を持ってたわけじゃない。いくらかの懊悩はあったし、嘆きもした。その姿がナイト君と同じだったらね。彼にはそれを打ち破って欲しいのさ」

「・・・そうね」

彼女にも思うところがあるのだろう、難しい顔をする。きっと彼女も、僕らと同じ穴のムジナだ。自身の生き方から逃れることができない。

「はい。ナイト君」

「あ・・・ああ、ありがとう」

僕のさし出したスポードリンクをナイト君は受け取り、そのままキヤップを開けて一口飲む。

「・・・」

さつきからアイリスは真剣に何かを考えているようで、話しかけられるような雰囲気ではない。

「じゃあナイト君。簡単に技の手本を見せるから、続けてやって

みてくれるかな。もちろん要所要所の手解きもするよ」

僕はナイト君を立ち上がらせて言う。その時だった。

「待ちなさい。あたしもあなたに教えてあげるわ」

アイリスが何かを決心したような顔をして言う。

「え？」

急なことにナイト君も呆気にとられる。

正直驚いたのは僕もだ。僕が格闘技を教えるとして、彼女が教えるのは魔乖咒だろう。簡単に他人に教授していいのもでもないだろうに。

「あたしがあなたに教えるのはこれよ」

アイリスは周囲に人がいないのを確認し、肌身離さず持っている本を開く。一言二言呟くと、本は光を放ち、その光は周囲に漏れる。すると地面から緑が生え、息つく間もなく花が咲き乱れた。

「うわ、うわー」

ナイト君は目をキラキラさせている。正直僕でもそうなるだろう。超常の力を全く知らなければ。でも、僕が自衛隊で必死に覚えた格闘技を教えてあげようとしているのに、何か面白くないな。

「あたしはね。魔法使いなのよ！」

アイリスが胸を張って言い、ナイト君はよけいに目をキラキラさせる。

「それって俺にも使えるの!？」

「使えると思うわよ。才能に多寡は有るけど」

さて、何故か空気になってしまった僕を尻目に、アイリスの魔乖術講座が始まったのだった。

僕の格闘技の講義が寸断されてしまったのは全く以って遺憾だが。

僕も魔乖術というものに興味はあった。

僕の使う「力」は、どこまでいっても僕自身が生物として持っている力の延長であり、高度な術式の構築や、式の構成に憧れのようなものを持っていたのだ。僕も実年齢は十四だし、魔法と呼べるものに対する憧れを持っていることに何の不思議もないだろう。

第一魔乖咒というものについて大まかな説明が終了する。

第一魔乖咒とは、いわゆる魔術にとつての四大要素、火、水、風、地を操るもので、どの系統の魔乖咒でも同じらしい。

魔乖咒の系統とは、彼女の「滅」の他に七つあるらしいが、それに対しての説明は今の段階では不要ということで省かれた。

説明終了。ではやってみようということで、アイリスはナイト君に魔力を流し、魔力を操るという感覚に慣れてもらうということをしている。

彼女曰く、僕の膨大な「力」は魔力といえるものらしく、それを使えばいいとのこと。

魔乖咒とは、系統ごとにそれぞれ違う世界の真なる姿、根幹に接続し行使するというものだ。Fate的な解釈で「根源の渦」というところか。

だが、「繋げる」という感覚がどうしても理解できない。一応、彼女から「滅」の魔乖咒のかかったアミュレットを拝借しているのだが、そういうものが「在る」ということまでは分かって、それを手繰り寄せることができない。どう試行錯誤してもだ。

その時だった。アイリスの人払いの魔乖咒によって人っ子一人いなくなつたはずの公園に四人目の気配。しかも飛びつきり邪悪なものだ。

気配のしたほうを向いてみると、そこには人差し指の先からライターくらいの火を出すナイト君の姿。彼の見の内からその邪悪な気配は発せられている。どうやらこの気配には本人であるナイト君はおろか、魔乖術師であるアイリスも気づいていないみたいだ。

僕のとつた行動は攻撃だった。瞬間にナイト君の眼前に移動すると右手を開放し、黒く染まったその手でナイト君の胸の中心を貫いた。ナイト君もアイリスも驚愕に目を見開く。

ナイト君はどうやらその衝撃映像にその場で気絶。そもそも僕の手は彼を透過している。自身の筋肉という支えを失った彼はその場に倒れる。

ナイト君の身体の中から出てきたのは黒い真珠のような塊だった。それが今、僕の手の上で逃れようと必死で足掻いている。

「一体どういつつもりなの!!」

僕がナイト君を殺したとも思ったのだろうか、アイリスが僕に詰め寄る。

「落ち着いてよ。彼には傷一つつけていない。それよりこれを」
僕は右手の上で暴れる黒い球体を、結界で強引に押さえ込んで彼女に見せ付ける。

「なん・・なの?これ」

黒い球体からは僕には及ばないにしても圧倒的な魔力が発せられている。それに人外の殺気。アイリスもこれには怯んでいる。

「分からない。ナイト君が魔乖呪を使った瞬間、彼の身の内に何か凶悪なものを感じた。それで僕は右手を反物質の身体に戻して、彼を透過して身の内にあるこれに攻撃したんだ。これが何かは正直どうでもいい。でも、残しておいたら面倒なことになる。それは確実だ」

僕は魔力をこめながら、結界ごと黒い塊を押しつぶしていく。黒い塊は抵抗しようと更に魔力を荒げるが、僕の力から逃れる術はな

い。僕が完全に右手を握りこむと同時に砕け、消失した。

しばらく気絶していたナイト君だったが、ビクツと痙攣した後跳ね起きた。

「うわっ！うわあああああああ！！！！！！」
そして急いで貫かれた胸元をまさぐる。しかしそこには傷跡一つない。

「て……あれ？」

さて、説明するとするか。嘘を交えてだけど。

「驚かせてごめんねナイト君。一応、説明はするよ。」

君は魔乖咒を発動させた。だけどその時、君の身体の中に異常な魔力を感じ取ってね。このままじゃ危ないと思ったから、強引に魔力を掌握しにいったんだ。君は自分の身体を貫かれたと思っただろうけど、僕の手は君の身体を通過し、魔力のみを押さえ込んだ」

「……………」

ナイト君は再度啞然としている。

「え……と、お姉ちゃんも魔乖術師なのか？」

ナイト君は急な展開に頭が混乱しているようだが、今考え得る中で一番正解に近いと思われる答えを僕にいう。

お姉ちゃん。どう考えても僕のことなんだろうな。まあ、いいけど。

「まあ、近い存在ではあるんだろうね」

そのように言うておく。僕の正体はこの世界でもドラゴンドライブの世界でも規格外だからね。広まるといういろいろ面倒だ。

その後、つついっ忘れていた自己紹介をした。ナイト君は僕を師

匠、アイリスを彼女本人の要望で先生と呼ぶこととなった。
そして沈む太陽を背に、解散したのであった。

僕とアイリスは暗くなった公園で向かい合う。

「それにしても良かったの？彼に魔乖咒のことを教えて」

「……本当は良くないわ。でも、何でかしらね。教えないといけないと思ったのよ。たぶん、昼にルシアに言われたことが関係してるんだと思う。それに、口約束だけど魔乖術のことはばらさな
いって約束もしたしね」

自己紹介のときにそんな話もしてたな。魔乖術師の存在が世間に
ばれたときの危険性とか。

「それにあなたこそ。あの右手、見せても良かったの？」

「僕も良くはない。けど、あんなものを法つて置いたら後日どんなことが起きるか分からないじゃないか。それに気づいていたのも僕だけだったし。」

あ、それはそうと、今晚はアイリスはどうするの？お金もパスポートも盗られたんでしょ？警察には言った？」

「あ」とアイリスは一瞬呆けて、みるみるうちに顔が青くなっていく。完全に忘れてたなこれは。

『ルシア、ルシア』

と、そこでルビーンから念話が入った。

『あたしたちはいつまでカードのままいればいいんだ？』

どうも、退屈になってきたらしい。

（うーん。この世界ではそのままいてもらうしかないよ。どう見たってドラゴンは一般的じゃなさそうだし）

『では、人の姿になればいいのではないですか？戦力は低下しませんが』

オパールが僕の声に答えた。

(・・・初耳ですけど?)

何か不自然に敬語になった。

『そういえば、ルシア様には言っていないませんでしたね。ルシア様もされているので知っているとばかり』

(うん。まあ、そういうことができるなら出てくれてかまわないよ。僕も皆がいてくれると心強いし。じゃあ、開放するから人の状態が出てきてよ)

『分かりました。パルレとザファイアにも伝えておきます』

そう言うと、念話は切れた。僕は目を離れた間にorzの状態になっっているアイリスに声をかける。

「アイリス。ちよつといい？」

「なに！？人がこんなに悩んでんのに！ほつといてよ！」

どうもいろいろと吹っ飛んだ状況になっているらしい。

「いや、紹介したい人がいるんだけど」

「紹介したい人？」

僕は首肯して腰の後ろにくくつてあるカードホルダーから四枚のカードを取り出す。ちなみに、カードは後六枚あるが、全部ブランクカードだ。

そしてカードを宙に投げる。するとカードは光りだして人の形になっっていく。

光が納まると、そこには四人の少女がいた。

ポニーテールにしたプラチナブロンドの髪に、エメラルドブルーの眼を持つ十代後半の少女、たぶん彼女がパルレだろう。ベージュの軍服チックな服を着て、背筋をピンと張っている。

黒髪の女性はおそらくオパール。パルレよりも若干若い印象を受

ける。着ているのはなぜかメイド服。

青いウェーブのかかった髪を肩口で切りそろえているのはザフィアか。白い清楚なドレスを着ている。十台中ほどに見えるが、背が低い。

真紅の、毛先に癖のかかった長い髪の、幼女。ルビーンだな。どこに出しても恥ずかしくない黒いゴスロリを着用、つれて歩いていると白い目で見られること間違いなし。

まともないでたちなのは一人としていなかった。いや、軽鎧にジヤケットの僕が言うのは筋違いとは分かっているが、どうしても言いたい。自重しろ。

そう思っていると、ルビーンが僕に近寄ってきて、手を握った。

「へへっ、この姿なら気兼ねなくルシアに触れるな」

今の僕の身長より、ルビーンの方が若干背が高い。はたから見ると幼女同士の戯れに見えるのだろうか。

それにしても、初めは警戒していた彼女だが、一緒に裏球を飛び回ること半年。ずいぶんなついてくれたものだ。

「ルビーン！主になれなれしいぞ！」

パルレが僕の手を握っていたルビーンを掴まえて引き剥がした。

？今のそんなに馴れ馴れしかったかな。それに、僕は彼女たちを部下にしたいとか考えていないから、馴れ馴れしいのは望むところなんだけど。

「いや、そんなことはいいんだ。むしろ嬉しいよ。僕は仲間として共に在りたいと考えてるからね」

「そ、そうですか？ででは、失礼して……」

パルレは立ち膝の状態になって僕に抱きついてきた。

(て、えええええええ！)

何してんの？僕男だよ？裏球では十五歳くらいの姿でいたし、そのことは彼女も理解してるはずだけど。

「あ・主、いい匂い」

そう言って顔をこすり付けてくる。龍の状態ではいつもされてることだけど、り・理性が、死ぬ。

「テメエが一番馴れ馴れしいじゃねえか!!!」

「グボツブ!」という声と共に、目の前のパルレが吹き飛ばされていく。ルビーンの放ったドロップキックによって。

パルレはしばらく地面を転がって止まる。そして長い髪で目元を隠しながらユラリと立ち上がった。

「何をする・・・ルビーン」

暗い穴の底から聞こえてくるような声だった。彼女の背後に黒い影が見える・・・気がする。

「何がじゃねえ!? そんな事していいならあたしが・・・じゃなくて! ああもう細かいことはいい! ブツ飛ばす!」

「上等だ。負けた方が今日一日カードに戻る」

「おもしれえ!!!」

パルレとルビーンは殴り合いを始める。バカン! とかガス! とかいう音と、ビリビリと響いてくる衝撃を感じながら、僕は「世界は思う通りにはいかないんだよな」と黄昏るしかなかった。

そんな僕は、肩をポンポンと叩かれるのを感じた。振り向くとザフィーアがいる。

「元気・・・出して?」

そう、無表情ながらもこちらを窺うような視線で言う。

「・・・うん」

「で、彼女たちはなんなのかしら？カードから出てきたように見えただけだ」

わけが分からないのが気に入らないのだろう。アイリスはこちらをジト目で見ている。

オパールは僕の背後で綺麗な姿勢を保ったまま不動で、ザフィーアは僕の横でジャケットの裾を掴んでいる。

「彼女たちもドラゴンだよ。僕の世界で「不思議」にのっとった存在は一部の特殊な人間を除けばドラゴンだけだね。カードから出てきたのは僕の世界の仕様ということだ。

僕の後ろの女性がオパール「よろしくお願いします。アイリス様」
横で服を掴んでいるのがザフィーア「……（コク）」。
あつちで戦っている二人の内、軍服みたいのを着ているのがパルレで、赤い髪のごスロリの方がルビーン」

「へえ。彼女たちもドラゴン……なのね」

「もちろん、龍の姿もとれるよ。けど、この世界で龍になるわけにもいかないだろう？だから人の姿で出てきてもらった。人の姿になれるのは僕もさつき知ったばかりだけど」

「ところで、止めなくていいの？あれ」

止めなくちゃ……いけないんだろうな。鉄の遊具がバラバラになったり、木が吹き飛んだりしてるし。明日か明後日の新聞に載るんだろうな。「怪奇！一夜にして破壊された公園！」とか何とかで。

「……止めてくるよ」

片や雷、片や風を纏った腕で拳を繰り出す。ぶつかり合うたびに雷光が目を焼き、暴風が木を薙倒す。彼女たちのぶつかる一帯は、

もう公園ではなく更地になりつつあった。まあ、彼女らが本気なら公園だけといわず、この街全体が瓦礫と化しているだろうから、一応の手加減はしているらしい。

掴み合っていた二人が距離をとり、睨み合う。ルビーンは両手に雷を帯電させ構えをとり、パルレは両手を広げて周囲に風を巻き起こす。雰囲気は僕は察した。「縛雷瘡」と「双翼嵐舞」だ。

冗談じゃない。手加減しているとはいえ、公園は木っ端微塵に吹き飛ばす。いくらこの公園が広く、中心地のここから住宅地まで距離があるとはいっても、吹き飛んだ遊具が住宅の屋根を突き破ったりとかは普通にするだろう。だからなんだと言われればそれまでだが、無駄な騒ぎを起こしたとも思わない。

僕は睨み合う二人の間に舞い降りた。

「ハイ、ストロップ。二人とも何やってんのさ。こんなに公園を破壊したら騒ぎになるだろう？カードに戻されたいの？」

僕の言葉に二人の肩がビクツと振るえ、脅えるような表情になる。

「ま、待つてくださいい主！せっかくこの姿で出てきたのです。それだけは……」

「そ、そうだ！あたしもカードには戻りたくねえ」

カードの状態ってそんなに嫌だったのかな。これは考えどころだ。

「冗談……というわけでもないけど、けんかをやめてくれるのなら別にいいよ。でも、この世界でこれ以上の無意味な破壊はしないでね。後でめんどくさくなるかもしれないから」

「ホ……」

彼女らは安堵の溜め息をついていた。似てる……のかなあ。

そして僕らはすぐに公園を後にした。流石に破壊されたあそこにいるといずれ警察に御用になるからね。

とにかく、昼から向けられ続ける奇異の目線から逃れるためにもまだ営業していたデパートに入り、全員分の服を買った。僕はファッションというのはよく分からなかったので、紺のスラックスにカッターシャツ、それと水色のネクタイ。店員さんを選んでもらった。どうもその人も僕のことを女の子と誤っていたようで、フリルのついた服を進められたが、スラックスをはいてみたところ、「これは・これで」とか言っていたので彼女の中では何かが完結したのだから。

アイリスは僕にお金を出してもらうことに抵抗があるのか、「そんなの悪いわよ」と言っていたが、「でも荷物取られたんでしょ？それに汗臭いままいるのは女の子としてどうかと思うよ。どうしてもって言うなら今回のことは貸しにでもしといてくれればいいからさ」と言つと渋々納得し、「あ・ありがと」と目を逸らしながら言った。非常に可愛かった。

その後警察に彼女の荷物が盗まれたことを報告に行き、電話を借りてキャッシュカードを止めた。

そして街をぶらついていると、熱心な客引きをしているクレープ屋を見つけた。生地が焼ける独特の甘い匂いに釣られ、ルビーンが客引きのお姐さんに近づいていく。

値引きしてくれたので僕が六人分買い、皆でいろんな種類のクレープを廻しながら食べた。「間接キス」になるけどいいの？と皆に聞くと、四神龍は何のことか分からず首をかしげていたが、アイリスは顔を真っ赤にして僕のかじったばっかりのクレープを見ていた

な。

そして最後の問題に行き当たる。そう。アイリスは今日泊まる所がないのである。まあ、そこは四神龍たちもせつかく出てきたんだし、今日はホテルにでも泊まるうということになって、駅から少し離れたところに見つけたビジネスホテルに、アリッサ・フォード名義で泊まることにした。サインしたのは無論パルレである。

僕は彼女たちがシャワー（四神龍たちには全く必要ない）を浴びている間にホテルの一階にあったコインランドリーに行き、アイリスの着ていた魔法使いみたいな服を押し込んでポーっとし、乾燥が終わると部屋に戻った。

で、今、僕は四神龍とアイリスと同じベッドで横になっている。そういえば、パルレに何部屋借りればいいとか、どの部屋を借りればいいのかという指示を忘れていた。彼女はもちろんそんな知識はないだろう。僕もビジネスホテルに泊まる機会なんてそんなになかったから失念していた。

おそらく彼女はフロント係に進められるがままに部屋を決めたはずだ。部屋がここ意外空いてなかったのかは分からないが、とりあえず、少女六人（に見える）の僕らにキングサイズのベッドのワンルームをあてがった。少し狭いだろうけど、子供も多い僕らなら問題ないと思って。

「ううん。ルシアあ」

右側から僕にしがみつくルビーンが寝ぼけ眼で見つめてくる。「全速前進 DA」とか叫びたくなる精神状態である。

四神龍たちに四肢を絡めとられたまま動けない僕に、アイリスは冷たい視線を向ける。

「あなたたち、そういう関係だったの？」

「誤解だ！彼女たちが人の姿になったのは今日が始めてなんだ！」

「五階？違うぞルシア、ここは六階。むにやむにや……」

ルビーン。そんなテンプレな間違いはどうでもいい。

「で、でも……ここで寝るしか、ないのよね……」

アイリスは意を決したように、顔を真っ赤にしながら掛け布団をガチガチの手で摘んで入ってくる。

「ほ……本当はこんなことしないんだから……」

流石にこれは不味いと思い、抜け出そうとするが、四神龍たちの腕から抜け出せない。どういう力で締め付けてるんだよ。

そうこうしている内に、アイリスが近づいてくる。僕らがかたまってるんだからスペースは十分あるだろ？お願いだからもつと向こうにいつてくださーい！！

今日は、眠れそうにない……。

ポケヨル第二話 ナイト（後書き）

・・・・駄文だ。そして主人公が途中で握りつぶした黒い塊・・・
・ラスボス消失。でも後悔はしてない。

ボクヨル第三話 気配

ナイト君の鍛錬を始めた日からおおよそ三ヶ月が経過した。

僕による基礎体力の向上、格闘技の模擬戦とアイリスによる魔乖術の修行は日を追うごとに苛烈さを極めていった。特に魔乖術の修業の方は。

魔乖術を教え始めて十分足らずで火を灯すことに成功していたナイト君は、やはりといっては何だが才能があった。教えているアイリス自身が彼の才能に驚くほどだった。

一般的な魔乖術師は、一生かけて第二から第三咒法までを習得する。第一咒法止まりの者も珍しくない。だが、あまつさえナイト君は十分足らずで魔乖咒を発動させ、二ヶ月後には第二咒法を学び始めた。これは魔乖咒に疎い僕でも分かった。彼はアイリスを遥かに超える才能を持っている。

そしてアイリスは彼を恐れた。膨れ上がる彼の才能に恐怖したのではない。このまま成長していけば、彼は魔乖術師たちにとって無視できない存在になる。ここが魔乖術師の少ない極東の地だからこそ何の問題にも発展していないが、彼の存在が明るみに出れば「滅」は彼を泥沼の戦いに引き込もうとするだろうし、他の家の魔乖術師たちから四六時中命を狙われることとなるのは間違いない。彼女は私利私欲を追い求める魔乖術師たちにナイト君の命が弄ばれる可能性を危惧したのだった。そしてその可能性は決して少ないわけではない。

彼女自身にナイト君の命を保障できるだけの力があれば、本家に無理を通し、彼をヘルブスト家に迎え入れることはできるだろう。だが、彼女自身にはその力がない。現状では、彼をヘルブスト家に迎え入れたとして、ヘルブスト家の者に彼が謀殺される危険さえある。

だから彼女はナイト君の記憶を奪う。僕らと出会ってからの記憶

を。

その日は唐突に訪れた。

ナイトはいつものように、学校が終わると師匠と先生が待つ裏山に向かった。学校ではいまだ無視が続いていたが、その後待つ彼女たちとの修行は楽しみで、学校で授業を受けていてもそればかりが頭をよぎって教鞭をとる教師の声に集中できなかつたが、何かを心待ちにするという経験は久しぶりのことであり、心地いいものだった。

しかしその日、裏山で待っていたのはいつもの楽しい光景とは違って変わっていた。何も木が燃えていたり、豪邸が建っていたりしたわけではない。いくなれば空気だ。いつもとは違う、張り詰めた痛々しい空気が先生から発せられていた。

ナイトが先生の前まで駆け寄ると、彼女は無言のまま上位魔乖咒を発動させた。

「見た、ナイト？これがあたしたちの技が「魔乖咒」と呼ばれ、忌み嫌われる理由。あなたには是が非でも、この技を習得してもらうわ」

彼女は焦っていた。実家から招集がかかったのだ。近いうちに自分はこの町から立ち去り、故郷へ帰らなければならない。ナイトの魔乖咒は封印していけばいいが、それでも万が一ということがある。彼女はその「万が一」に備えて、ナイトに自身を守る力を持たせたかった。

圧倒的。ナイトはそれ以外に言葉が見つからなかつた。人といわず、土木機械をも一瞬の内に葬り去るであろう一撃に吐き気さえ覚

えた。

そして先生は啞然とするナイトに向かって、今の魔乖咒を行使するように命令した。

彼はようやく第一咒法を習得し、第二咒法を習い始めたばかりである。先生が発動したのは第四咒法、第二咒法などと術式の密度は段違いのものだ。今、現状の彼に第四咒法の発動を命じるのは気が狂っているとしか思えない。ナイトが人外のごとき才能を宿しているとはいえ、不可能な話だ。

しかし先生は容赦なかった。

「本気で殺されたいの!? さつさとやりなさい!!」

先生が本気であることに気づき、ナイトは今しがた先生が発動させた魔乖咒を展開しようとするが、やはり上手くいかない。魔力切れを起こしてへばったナイトを先生は容赦なく叩く。

「さつさと立って続けなさい! 殺すわよ!」

ナイトは師匠の方に目を向ける。しかし師匠はそんなナイトを一瞥し、どこかに去っていった。

そんな二人を目の当たりにして、ナイトは悲しかった。世界の真理を目の当たりにし、絶望のそこにいたナイトに、二人は正義の力を教えてくれた。そんな二人の突然の変容。ナイトは涙が止まらなかった。

もはや視界も曖昧になり、魔法陣を書き続けた腕は痙攣している。それでもナイトは練習を続け、奇跡が起きた。ナイトは第四咒法を発動させたのだ。

ナイトが発動させた第四咒法は先生のものと同様に地形をゆがめるほどの威力を発揮した。

それを見た先生は満足そうに頷き、疲れ果てて倒れたナイトに近づいた。

ナイトは自分が誰かに抱かれているのに気がついた。それは師匠だった。先生の扱きの間、姿を見せることのなかった師匠が、自分を優しく抱きとめていた。

「よくやったわね、ナイト。本当に……よくやったわ。もうあたしに、あなたに教えることはないわ」

先生は一歩足を引き、半身の状態になる。師匠はナイトをその場に横たえたと立ち上がった。

「さようならよ、ナイト。あたしたちは行くわ。あたしたちのことは忘れなさい」

第四咒法の行使で力を使い果たしたナイトに、二人を追う力は残っていなかった。立ち上がることさえできず、その場で意識を失った。

そして気絶したナイトの夢の中に師匠と先生が現れた。そして先生はなぜ去っていくのか、なぜナイトに厳しく第四咒法を教えたのか、理由を語った。

先生の故郷から招集がかかり、先生は帰らなくてはならなくなったこと。ナイトの魔乖呪の才能が予想以上であったこと。もしナイトをこのまま置いていけば、いずれ魔乖術師を狙う組織<魔女獵人>に狙われることになるだろう。そして八祖のどこにも属していない魔乖術師は他の魔乖術師からも敵視されることになる。ナイトは獵人と魔乖術師、双方から敵と見なされ、命を狙われることになる。だがそうなった時、少年を守るべき師匠や先生はもういない。ナイトは自らを守るだけの力をテにする必要があった。だから無理を承知で先生はナイトに第四咒法を教えたのだった。

「あなたの記憶を封印するわ。下手に覚えていれば、獵人に目を付けられてしまうからね。あなたはあたしたちと出会い、魔乖呪や格闘技を覚えたことを忘れることになるわ」

そんなのは嫌だ！師匠や先生のことを忘れたくない！

「安心しなさい。あなたの力は、あたしでは押さえきれない。成長すれば、その封印をあなたは自分で解いてしまはずよ。そしてそうなった時、あなたには自分を守るだけの力が必要なの。そのための第四咒法は教えたわ。だからナイト、あなたは胸を張って、自分の道を行きなさい」

二人に何か声をかけたくて、ナイトは口を開くが、声が出ない。

「ごめんね、ナイト。ルシアにはどうか分からないけど、あなたを守るだけの力が今のあたしにはないの。獵人と魔乖術師、どちらを相手取るにしても、今のあたしは力不足。あたしは自分より強い人をいくらでも知ってるわ。だから、あたしは強くなるわ。そしていつかあなたと再会したとき、成長したあたしの力をあなたに見せてあげる。だからあなたも忘れないで、自分の中の正義を、それを貫く心を」

「じゃあね、ナイト君。僕と君も、いずれ再開する時が来るかもしれない。ここでの出来事を忘れた君が、どう生きるのかはまさに君次第というところか。しっかりね」

そうだ。先生が去る理由は分かった。でもなんで師匠まで去るのだろうか。ナイトは師匠に目を向けた。

「ん？そんな目を向けないでくれよ。僕は核爆弾と一緒に、居るということがばれるととても不味いんだ。僕の隠形は一流の魔乖術師には通じないということが分かったし、君といるといういと都合が悪いんだよ」

二人がナイトから去っていく。ナイトはその後姿をしっかりと目に焼き付けた。その後姿にナイトは女神を幻視した。美しく、尊い二人の姿を、ナイトは障害忘れまいと目に刻み付ける。俺の師匠は少し気難しく、でも穏やかで、「僕」なんていう男みたいな一人称を使い、浮世離れた雰囲気纏っている。ハッキリいって正体不明。先生は優しく、高潔で、そして気まぐれな魔乖術師。

少年は初めてあった時から、二人のその姿に、人柄に、魂に憧れ

「い、いや、そうじゃないけど……」

アイリスは逡巡する様子を見せ、結局僕の言葉を否定する。どうやら僕の仮定は外れたのかな。

「じゃあ、行こうか」

「ええ」

アイリスは自分の向かう道の正面を見つめて言う。四神龍たちも僕の言葉に首肯した。

そして僕たちは新たな地へと向かうのだった。

飛行機を降りた僕たちは電車を乗り継いでのんびりとしたたびを満喫していた。もちろん、僕の魔力制御の練習やアイリスの魔乖咒構築の鍛錬は欠かすことなく行われていたが、いざ、宿を出て電車に乗るとすることがなくなってしまっていた。まさか一般人の目がある電車の中で魔乖咒を使うわけにはいかないし、四神龍たちの力を出すこともできない。自然とババ抜きだのポーカーだの、トランプゲームをはしごすることになるのだった。覇者は無表情のザフィーアである。行ったことはないけど、修学旅行的だと思う。

勝負と聞いては黙っていられないパルレが異常な対抗心をザフィーアに燃やしていたり、波長が合わないパルレが異常な対抗心をザフィーアに燃やしていたり、波長が合わないのか、ただ単に勝気なもの同士が相対した結果なのか、やけにお互いに敵愾心を持ったらしいアイリスとルビーンの行ったスピードの真剣勝負で、トランプが摩

擦熱で燃えたときは、その微妙な結末に少し笑った。

だが、時々アイリスに焦りのようなものがあるのは感じ取っていた。何かに急かされるように強くなることを求めている。気がつく
と魔導書に目がいつていることがしばしばあった。哀しいなと思う
が、止めることは彼女にとって恥辱だろう。僕がそうであるように。

僕は「生きたい」と思ったから自衛隊の門を叩いた。しかし、「
生きたい」と思うそもそもの要因は何なのか。多くの一般人は、「
死にたくない」と言っただけでも、銃を取ることはしなかった。そ
れはつまり、あの状況において生きる意思がないのと同じだ。他人
と比べて世界というものに生きる理由のない僕ですら銃を取ったの
だ。僕と彼らの違いこそ僕が「生きたい」と思った理由になるのか
もしれない。

それは「理不尽」だ。人という生き物は元来強欲な生き物で、自
分の欲をまるで制御できない。自分は正等だと言いながら、周囲を
自分の思ったとおりに扱おうとする。

それは時に、親が子供に強要する過剰な勉強だったり、政治家た
ちがテレビの前だけ都合のいいことを語りながら、自分の懐に賄賂
を仕舞い込む様だったりする。彼らは言う、「私は子供のためを思
ってしている」とか、「自分は国の為に粉骨砕身頑張っています」
とか。

でもそれは結局自分がそうしたいが為に他人や世間に強要してい
るのだ。前者は子供が有名大学を出たことを自分のステータスにし
たい。後者は単にお金が欲しい。自分の欲の為に他人に苦痛を強要
する。現実はその通りだ。

僕とつてそんな「理不尽」というものは耐え難いものだった。だ
から生きたかった。自分の感じているこの苦痛を世間に知らしめて
やりたかった。そんな自分の気持ちが消えるのは許せなかった。自
分の死か他人の死、それを問われて他人の死を選べるくらいには。

彼女にもあるのだろう。力を求める明確な理由が。それこそナイト君との口約束など関係なく、彼女が高潔であるための意志の根幹に関わるようなものが。

まあ、ともあれ僕は初めての海外である。やはり日本とは感覚が違う。車窓からの景色も情緒溢れる日本の田舎とは違い、開放的だ。何しろ山一つとっても日本とはスケールが違う。それにふもとに広がる草原や森林でさえ広大な面積を埋めている。

アイリスが呼び出されたのはスウェーデンにあるヘルブスト家の別荘のようで、自然がそのまま残るバルト三国のあたりなので僕も久々に心安らぐひと時だった。

「じゃあ、ここで待っていなさい。長くとも一週間もあれば戻ってくるわ」

そう言っただけでアイリスは去って行った。

僕たちが案内されたのは旅館のような建物だった。幾分田舎なので、ビジネスホテルのようなものはないだろうが、旅館のような客とのコミュニケーションを重視する宿泊施設に案内されるのは、この国の言葉を知らない僕や四神龍たちとしては気が引ける思いだ。

ともあれ、ここ以外の場所を探したとしても同じことになるのは明白なので、この国のトラベルガイドを見ながら片言で話し、受付の人に一週間分の宿泊料金を払う。

「ルシア！これからどうすんだ？」

部屋に荷物を置き、ストレッチをして全身残りをほぐしているのだろう。パルレや、ひたすらにボーっとし続けるザフィーアを横目に

見ているとルビーンが話しかけてきた。オパールはお茶を淹れられている。

「そうだね・待っているのも退屈だね。とりあえず、この町を観光して、あと隠形の練習とか、できることはやっておきたいな」

「では、町外れの森に行くのはどうでしょう？あそこなら、十分に鍛錬が可能かと思えます」

オパールが紅茶の入ったマグカップをお盆に載せてやってきた。

「ありがとう」

「いえいえ」

「森の中か。君たちに手伝ってもらえば鍛錬にはなるよね。一応ヘルブスト家が近くで集まっているから魔力を放出するわけには行かないけど、僕らに今必要なのは逆にそれを隠す技能だからね」

「？何でそんなのが必要なんだ？」

「ルビーン。あなたはもう少し自分で考えてみるべきです」

「な、なんだよ、オパール」

ルビーンはオパールの正論にたじろいだ。

「ルシア様が無駄な争いを嫌うのはこの半年で分かっていたことでしょう。そして、世間に入るのですよ。私たちに力があると分かると襲い掛かってくる下賤な者たちが。無論、ルシア様はそんな凡弱者たちに負けることはありません。しかし、鬱陶しいのですよ。何故、ルシア様がそのような者たちを歯牙にかける必要があるのです。それにそんな者たちが頻繁に来ては、ルシア様が私たちにまっつてくださる時間が減ります」

オパール。何気にひどいな。だが、おおむね理由としてはそんな感じだ。付け加えるなら、僕自身、戦場で生き残りたいなら身を隠す技術が重要であることを知っているから、というところかな。

「そ・それは、重要だな」

そしてルビーンはその場でブツブツと何かを呟き始めた。

「ルシア様」

紅茶を一口、口に含んでいるとオパールがルビーンの方から僕の方を向いて言う。

「何かな？」

「私どもは、今まで隠れる必要がありませんでした。ですから、いかに力の総量がルシア様より劣るとはいえ、気配や魔力の隠蔽は正直ルシア様以下です。私どもにも稽古をつけてもらいたいのですが」

四神龍として崇められていた彼女たちは、身を隠す必要がなかった。それに、生まれつき強大な力を宿していると、どうしても自分を鍛えるということに気が向かない。

彼女たちは緊急措置としてカードに戻すことができるが、それは彼女たちも本意ではないのだろう。自分の力が十分ではないということの証明になるのだから。

「分かった。でも、僕も力の制御については完璧じゃないし、お互いゲーム形式で感覚をつかむということでもいいかな？」

「それで結構です」

僕たちは森の中に移動した。なにぶん緯度が高いので密林のように身を隠すスペースが多くあるわけでもない。だが、一応かくれんぼくらいはできるはずだ。

「さて、気配や魔力の制御を学ぶのに、僕の考えたゲームはこれだ」

そう言つて、僕は懐から五本の紐を取り出した。

「我が主。それは何なのですか？」

「ん？ただの紐だよ。これを腕に蝶結びで結んで取り合うんだ。もちろん。相手に気づかれては取ることは難しい。僕も魔力は身体強化くらいしか使わないから、君たちと同じくらいの戦闘力になる

はずだ。上手く相手に気づかれないように接近し、取り押さえるなり何なりして腕に結んだ紐を取れば勝ち。取られたら負け。それだけだよ」

今回は僕に一日の長があるので、僕と四神龍のチームに分ける。誰が僕と同じチームになるか揉めていたのでその救済措置でもあるが。

「なあなあ。もしルシアの紐を取れたら何かいいことあんのか？ ルビーンのその言葉に他の四神龍たちも耳をそばだてる。」

「うん。そうだね。じゃあさつき町で見つけたワツフルの露店で一人だけスペシャルミックスワツフルを食べるっていうのは？ 僕が勝つたらもちろん僕が食べるけど」

僕のその言葉に四神龍たちの眼がキラリと光る。

女性というのは男性より甘い物への依存度が高いらしい。甘いものを食べたときの脳内麻薬の分泌が男性より活発なのだそう。もちろん彼女たちもそうなのだろう。

ナイト君に修業をつけている間、彼女たちはあのクレープ屋に通いつめていた時期があった。「太るよ？（四神龍である彼女たちが太るのかどうかは半信半疑だったが）」と言ったら治まったが。

ともかく、最近のご無沙汰なので自制心が外れかかっているのだろう。

「じゃあ始めるよ。僕は先に身を隠すから、三分経ったら皆も行動開始っていうことで」

僕は森に向かって駆け出した。

僕は木の陰に身を隠し、息を殺す。アイリスの言っていた魔力と言うものを感じ取り、前進に行き渡らせて進退を強化し、しかし外

には一片も漏らさないように心がける。

しばらくすると何かが近づいてくる気配を感じたのだが……
そこで「あんなこと言わなきゃよかった」と後悔した。

向かってきたのはパルレ一人だった。魔力を感じとっただけだが、他に来るものの気配は感じない。隠形が完璧であるという可能性も考慮されるが、彼女たちが初心者であるという前提からその可能性は極端に低い。

僕はパルレの気配に近づいた。やはり彼女は一人だ。僕の紐を取れる者、つまり彼女たちのグループでの最終的な勝者は一人ということでもたまた揉めたのだろう。

更に近づき、彼女を視界におさめる。周囲への警戒は怠っていないようだが、自分の気配を隠そうとは考えていないようだ。もちろん僕にも気づいていない。

僕は木の陰を渡りながら彼女に接近する。一定の距離まで近づいてからは、地面を踏む音が彼女に漏れないよう、木の枝の上を足場にする。

そして一息に飛びかかれる距離まで接近に成功。彼女が僕のいる方向から目を逸らしたのを好機と見て飛び込む。

気配に感づいたパルレは苦し紛れに腕を振るうが、僕はそれを絡め取って間接をキメ、彼女を地面に押し付けて右腕の紐を取った。

「僕の勝ち、だね」

「ええ。見事です。我が主」

パルレはベージュの軍服についた泥を払って立ち上がる。

「パルレは自分の気配を隠すことを意識するべきだね。いくら警戒しているといっても五感だけじゃ限界がある。それに自分の気配を鎮めないと相手の気配は掴みづらいと思うよ。僕はともかく皆は始めたばかりだしね」

「……はい」

やっぱり悔しいのだろう。パルレは顔をしかめる。

「じゃあ、最初の地点に戻っててね」

僕はそう言っつて、再び気配を隠した。

パルレを取り押さえている間の僕の気配を感じ取ったのだろう、オパールの接近を感じた。気づかないうちにかんりの接近を許している。彼女には見込みがありそうだ。

順調に接近してきていた彼女だが、急に僕の気配が隠れたからか、いつきに鈍足になる。慎重に来る気なんだろうけど、本当なら僕に気取られたことを考慮して一気に攻めに来るか、いったん引く場面だね。彼女たちほどの身体能力があるのならなおさら。

そして僕は周囲を極端に警戒しながらじりじりと移動するオパールを発見する。どうやら一方方向へ移動しているようで、僕は彼女の移動先で息を潜める。

そして僕の隣を通り過ぎるやいなや、足技で彼女を絡め取って蹴るなんて真似はしない。足を使った柔術)、紐を奪う。

「参りました。ルシア様」

身動きの取れないままオパールはいう。僕は技を解いて立ち上がり、彼女も立ち上がるように促す。

「気配、魔力共に隠蔽はそれなりにできてる。でもあとは状況判断かな。僕が気配を消したとき、本当はいったん引くべきだったんじゃないかな。僕がオパールに気づいたかもしれないということを考慮して。これは別に時間制限のあるものじゃないんだし」

「……はい」

「じゃあ僕は次に行くからね」

ルビーンは森の中を駆け巡っているようだった。しかし驚くことに隠形は形になっている。オパールの方がどちらかといえば優秀だが。しかし、彼女にはいかんせん集中力が足りないのだった。

「あー！ルシアはどこにいるんだよ！」

そう叫んで両手両足を地面に投げ出す。僕は投げ出された腕から紐を引き抜いた。

「あ………」

「もうちょっと集中しよう……ね」

それ以外にかける言葉が見つからなかった。

「……うん」

ルビーンはとぼとぼと最初にいた場所に戻っていった。

四神龍の中で、最も隠形に優れていたのはザファイアだった。性格上の問題なのかもしれないが。

とにかく、彼女以外の三人はすぐに見つかったのだが、彼女は三十分森の中を歩き続けても見つからなかった。一応、範囲は決めているのでこちらも見つからないと彼女に僕が感知されている可能性もある。

もう少し北の方を探してみようか　そう思っていたとき、背後から何者かの気配を感じた。僕はとっさに回避行動を取る。そして何者かが通り去った方を見ると、ザファイアがいた。

驚いた。完璧だった。気配の殺し方から、奇襲に至るまで、その

技術とタイミングは一朝一夕に身につくものじゃない。こういうのは本当は幻を操るオパールが一番得意じゃないかと思っていたのだが、違ったようだ。

「失敗した……」

「いや、すごいよ」

「……そう?」

「うん」

しかし、僕に気取られたのが運のつき、格闘技術という、このゲームの本質とはあまり関係のないところで彼女は負けるのだった。

最初の、紐を結んだところまで僕とザフィーアは戻ってきた。三人はおとなしく待っていたようだ。ルビーンは少し暗くなっているけど。

「ど、どうなったのだ?」

僕とザフィーアが来たのに気づいてパルレが聞く。

「……負けた」

ザフィーアは取られた紐を見せて答えた。

「……ふう……」

三人は安堵しているようだ。何にかは分からないけど。

僕は気になっていたことを聞いた。

「何で協力したの?」

四神龍たちはその言葉を聞くと目を逸らした。そして、ルビーンが「スペシャルミックスワッフル・食べたかったんだ」と洩らす。やっぱりか、と思った。次回からはこういうことをいわないように気につけよう。

空を見ると、まだ明るいながらも太陽はかなり低くなっている。

始めた時間が遅かったからな。今日はこのくらいにしておこうか。

「じゃあ、食べに行こうか。スペシャルミックスワッフル」

「いいのか!?!」

ルビーンは眼を輝かせて僕の方を見る。

「いいよ。別に禁欲生活を送ろうってわけでもないし、僕も興味はあるしね」

正直、ホイップクリームに沢山のフルーツが乗った「スペシャルミックスワッフル」は食べてみたいと思った。クランベリーとかなかなか日本じゃない味だし。

「じゃ、帰ろうか」

「おう!?!」

スペシャルミックスワッフルは、めちゃくちゃ美味かった。ついでにルビーンのはしゃぎ様は半端なかった。

ボクヨル第三話 気配（後書き）

感想欄にて、「ラスボスのおかげでナイトが魔乖咒が使えていたはずではないのでしょうか？」という指摘がありました。

僕もこれには悩んだのですが、後半になればなるほど設定が錯綜する「僕と彼女に降る夜」の世界に長く居るのは危険（作者が）ということ、ナイト君は別にラスボスがいなくても魔乖咒が使えたということにしました。不快に思われた方がいたら申し訳ありません。

この小説でのナイト君の位置づけに関しては、僕が考えていきます。とはいえ、ナイト君はあまりこの小説の深いところ（この小説に深みがあるのか？という疑問はぬきにして）に関係ありませんが。

それにしても、ボクヨル、いいですね。気がつくといつの間にか手にとって読み直しています。この小説はちょっと売れませんが。

ポケヨル第四話 絶端(前書き)

長い・・・疲れた。

ボクヨル第四話 絶端

アイリスと出会ってから、五年の月日が流れた。

ヘルブスト家の別荘から帰ってきた彼女は変わった。彼女は毎日毎日、自分の身体を痛めつけ、自分の身体に影響があると分かっている。「滅」の魔乖咒を使い続けた。「滅」の咒法は身体への負担が大きいらしい。僕は属性「水」で彼女の体調を整え続けたが、三年もすれば成長が止まり、彼女の自慢の金髪は色が抜けた。今、彼女の身長は155cm。欧州人としてはかなり小さい部類に入るだろう。

そんな彼女は最初の三年で自らを鍛え続け、成長が止まってからは各地にいる「最強」の名を冠する人物たちに勝負を挑み続けた。

僕と模擬戦をし続けた結果だろう。彼女は大きな怪我を何度も負いながらも、負けることはなかった。

僕は僕で自分の力の制御や把握に努めた。真龍と元龍の力について、把握しきれしていない部分も多かったし、把握した後も、その力を使って何か他のことは出来ないかと、応用を考える。

真龍・元龍と融合して得た魔力は膨大である。それこそ無限だ。しかし、潜在的な量が無限なのであって、一度に引き出せる量は限られている。それでもこの世界の魔乖術師たちからしたら絶望ものなのだが。

潜在量が無限というのはとてつもないアドバンテージなのであって、一度に引き出せる量を超えて威力を出そうと思ったら、魔力を収束させればいいのである。単なるドラゴンドライブ8属性（「甲」は特性上できない）の収束砲だが、僕はこれをカレイド・スフィアと名づけ、有事以外は使わないようにしようと決めた。威力がありすぎるからだ。

この五年、僕もアイリスや四神龍たちと鍛え続けていた。真龍も

元龍も鍛錬などしたことがないだろう。封印され続けていたのだし、当然だ。そんな僕が真面目に鍛えたらどうなるか。瞬間的に引き出せる魔力量が五倍に跳ね上がった。

そんな僕の収束砲は、収束段階でユーラシア大陸全土を揺るがした。そんなことになるとは思っていなかった。後でしこたまアイリスに怒られた。

そのほかは、アイリスの要望で彼女を鍛えるために考え付くほとんどの武器武装の類の使い方を学んだことだろう。極めるには程遠いが、今では武器の形状を見ただけで取り回し方が頭に浮かんでくるくらいにはなった。一番得意なのは「刀」かな。

生き急ぐ彼女のペースに合わせていると、これでも暇な時間ができるのであって、その時間を利用して僕は礼装の製作をしていた。特に理由があつたわけではない。しいて言うなら、物作りに興味があつたというところか。そこに目の前に転がっている魔乖咒。ごく自然なことだと思う。

僕は有り余る魔力によって材料の変質や性質の改変が容易いので、必要となる知識を与えてくれる本さえあれば習得は簡単だった。その本もアイリスが持っていることだし。

僕の作品は魔乖術師の中でも結構有名になってきている。最近では「終末の錬金術師」と呼ばれているらしい。僕を捕らえるためにはなつた魔乖術師や獵人が全滅しているからだそうだ。大抵は僕の前に来る前にアイリスや四神龍たちに殺されるから。

余談だけど、擬人化の練習もきちんとしており、何とか十五歳の姿に戻ることができた。今は十八歳を目指している。もう少し背が高くなつたら、ちゃんと男に見られると思うから。

その僕たちは今、ヘルブスト家に向かっている。どうも、魔宴に参加する人物を決めるらしい。順当いけばまずアイリスだけだ。そんなときだ……

「ちよつと待ちな。そこの譲ちゃんたち」

と声をかけられた。

声のしたほう似たのは老人。しかし彼から漏れる威圧感は今までは出会ったどの強者より強い。彼は確実にアイリスより強い。

「何ですか？ 僕らは旅行中なのですが」

僕はとぼけてみるが、アイリスは僕の隣で老人を睨みつけている。

「キサマ……絶端^{たちばな}」

剣聖とも名高い人物の名前である。曰く、「最強の剣客」「魔滅の剣」「万象断裂」伝説の剣刀師として名高い彼が何故僕らの前に現れる……愚問だったな。強い奴がいる。それだけで動く理由にはなる。アイリスがそうであるように。

「譲ちゃんたちだな。世界中のつわものに勝負を挑んでるって奴は」

「そう……私だ。何か問題があるか？」

アイリスが半身になって構えをとりながら答える。額からは汗が伝っている。

「いいや？ 問題なんてねえよ。俺は最近ポツと出てきたのがどんなのか見に来ただけだ」

老人はそう言っているが、闘気を隠そうともしていない。戦う気だ。

今ここで戦えば、アイリスは死ぬ。幸運とか奇跡とか、そんなもので覆せる實力差ではない。

アイリスは老人に向かつて殺気を放つ。それに老人は反応した。

「この殺気……そうか、おめえだな？ ナイトに魔乖咒を教え

やがった奴は。どうしてくれる。そのせいで俺の孫は剣の道をあきらめる他なくなっただぜ？天才には程遠いが、それなりの才能はあつたつてのによ」

力のある刀剣には意志が宿る。刀は外法の力を使う者を認めることはない。世界を回っている間に見聞きしたことだ。

それにしてもナイト君が絶端の孫だったとは。確かに、彼の動きには素人ではない精細さがあつたが。

「まあそんなことはいい。殺ろうぜ!？」

老人の闘気が膨れ上がる。アイリスの額からは脂汗が噴き出し、眉間に皺がよる。

僕は緊張の張り詰めた二人の間に割って入った。

「ルシア！何のつもりだ！」

アイリスは焦っていたのだろう、いつもの冷静さをかいた口調で僕に言う。勝負を止められたという屈辱もあいまっているのだろうが。

「分かるだろう？アイリスにはこのレベルの相手は無理だ。戦ったところでむざむざ殺される」

「だからといって逃げるといのか！」

「そうだよ」

「っ!!!!!」

「勝負と戦争は違う。魔乖術師であれ剣刀師であれ、ルールの決まった勝負をしているわけじゃない。勝てないのならどうするか、それを考えるのも戦いのうちに入るんじゃない？」

驚くことにこの老人は人間状態の四神龍たちよりも少し強い。一対一で勝利を得ることが出来るのはこのメンバーでは僕だけだ。

「てことで、絶端さん。僕と戦りませんか？」

僕のその言葉に老人は破顔する。

「ク・クハハハハハ！おもしれえ譲ちゃんだ！何だ!?!一番弱いと見てたが、俺の勘違いだったようだな！キタぜ！俺を殺そう

つて意志が！いいぜ！存分に楽しもうじゃねえか！！！」

閃光が僕の目の前を横切る。気圧の変化が僕の頬をなで、前髪を揺らした。

いかに「甲」で防御力を底上げしているとはいえ、「人」の身体では限界がある。真正面から受ければ、腕ごと僕は両断されるだろう。

一瞬の内に翻った刀が僕の胸を狙う。僕は身体を刀の下に潜り込ませ、振りぬいた直後の腕を左手で押さえて横っ腹に膝を打ち込む。しかし予期されていたのか半歩身を引いてかわされ、お返しと袈裟が迫る。僕はそれを強化した右腕で逸らす。

「強え！強えな譲ちゃん！ここまでとは思ってなかったぜ！しかも無手で俺と互角なんてな！魔乖術師でもねえってのに。それにこの体捌き、ナイトを鍛えたのは譲ちゃんだな！？」

「ええ。僕が鍛えました」

「生き汚ねえ無様な拳だ。だが、感謝しとくぜ。この手の格闘術はなかなか学べねえ。動き一つ一つに生死が見えやがる。譲ちゃん、名前は？」

「ルシア」

「クハハ！そうか、譲ちゃんの話しも聞いてるぜ！「終末の錬金術師」ってな！」

この会話の間にもじりじりと僕らはお互いに距離を詰める。

「チツ！！！」

やはり最初に仕掛けたのはリーチに勝る絶端。逆胴を予感させてからの袈裟、まさに閃光とでもいうべき速度で放たれる。しかし、

斜めに迫る刀は逸らしやすい。先ほどと同じ要領でかわす。

まあ、そんなことは彼も承知の上なのだろう。振りぬかれた袈裟は流れるように胴に変化した。彼と僕の距離はこの段階でかなり近かった。僕は更に接近して刀を握る両腕を押さえつけ、捻って体位を崩し、そのまま地面に打ち付ける。そのままうつ伏せに倒れる彼に踵落とし。

だが彼は気配で分かるのか首を捻ってかわし、距離をとる。

「危ねえ危ねえ。死ぬとこだったぜ」

首を捻りながら老人は言う。言葉とは裏腹にまだまだ余裕そうだ。まだ勝負は長引きそうだな、手札を切るか？

僕が魔力の属性変化を使おうと考えていると、老人は刀を納めた。「やめだやめ。俺じゃ讓ちゃんに勝てねえ。そうなんだろう？」

老人は僕に聞く。

「そう・・・でしょうね」

僕は肉体チートである。確かに、全能の域には達していないが、万能といえる属性変換はある。しかし、それは確実に戦況を有利に進められるというほどのものではない。

だが、僕は負けない。それは僕の肉体が無限に再生し、そもそも龍の身体を開放すれば物質は透過、エネルギーは無限に吸収という理不尽な状況が発生するからだ。もっとも龍の身体は奥の手なので、簡単に見せる気はないが。

しかし人の身体でもエネルギーの続く限り・・・つまり無限に僕は再生する。それに加えて僕のコアとでも言うべき動力器官は人の状態でも龍の状態でも変化なし。つまり真つ当な手段では破壊不能なのだ。

僕と老人の技量は互角。しかし老人はどこまでいっても人間だった。肉体の再生ができなければ、体力にも限りもある。おそらくこれまでの戦闘で僕の体力が落ちないことを悟ったのだろう。

「ケツ！はつきり言ってくれなせ。だがまあ、事実だろうししょ

うがねえか」

老人はそう言つて身をひるがえす。

「あ、ちよつと待つてください。絶端さん」

「ああ？まだ何かあるのか？」

老人はこちらを振り返つて答える。

「確かナイト君は剣刀師としての将来を経たれたといつてましたよね。外法の力を行使する者は、剣に認められることはない。しかし、外法の力を使うことを前提に打ち出された剣があるとしたら？」

「……なんだと？」

老人はいつきに怪訝な顔になる。

「オパール！「アレ」持つてきてくれる！？」

僕は遠くで観戦していた彼女たちに聞こえるように大声で言った。

「ルシア様、これを」

オパールが素晴らしいながら僕に差し出したのは白木造りの長刀。名はない。半年前、日本を訪れた時に名工と謳われる人間と造り上げた世界にただ二振りの魔乖剣・その一本だ。

彼はかのく七剣八刀ソード・オブ・ブレイドに届くことを望み、僕の礼装師としての外法に頼つたのだ。しかし彼は、それが自分の誇りを穢す行為というものも分かつていた。魔乖剣を完成させ、その刃の輝きを見た彼はその場で両腕を切り落とした。そしてもう刀は打たないと、そう言い残して去つて行つた。

僕はオパールから刀を受け取り、老人に差し出す。

「こりゃあ……」

魔乖呪の為に造られた、魔乖呪によつて威力を増大させる刀。本来ありえない奇跡である。

「かのく七剣八刀には及びませんが……この刀ならナイト君は剣刀師も目指せるのでは？」

「だが……いいのか？本来合わさるはずのない外法がこめられた刀……単に魔乖術師が刀を造るといふレベルの話じゃねえぞ？」

「まあ、僕は魔乖咒使えませんが、実はもう一本ありますから。それはできの悪いほうなんです」

「いいんだな？俺は遠慮なく貰うぜ？」

そういう老人の目はキラキラしている。「ナイト君・南無」と言いたくなつた。

「ええ。ナイト君の手に届くのなら、僕はそれでいいですよ。彼はなかなか現代に少なくなつた武士みたいな人間ですからね」

「武士、武士か！じゃあいつちよこの刀に恥じないように鍛えてやつか！アーハツハツハツハ！」

そう言つて今度こそ老人は去つて行つた。最後まで僕を女と勘違いしたままだつたな。

「理不尽だ」

戻つてきた僕にアイリスが言つた言葉だ。

「私も相当に鍛えてきたはずだ。だが、何故私とお前の技量はこんなにも離れている」

「・・・・・・・・・・」

いかにも不機嫌ですと眉を歪める彼女に、僕は何も言うことができない。

「いや、分かっているさ。私は不満を吐露しているだけだ」

「だが、納得できないではないか・・・」と、その後は声が小さくなつて聞き取れない。彼女の様子や世間の評価からして、絶端という老人はこの世界でも最強の部類。それと互角に戦つた僕に思うところがあるのだろう。

僕は四神龍をカードに戻し、ヘルブスト家に向かうのだった。

ヘルブスト家は、何と云うか吸血鬼か魔王でも出てきそうな洋館だった。細部まで装飾にこだわっていることは分かるが、全体が暗く、向こうの石膏像なんかは涙を流しているかのような染みがある。僕は今回、「終末の錬金術師」としてここを訪れた。今の僕の格好は紺色にフードと袖、そして裾の先に銀と金の装飾が入っているローブを着ている。これは龍の状態のときの僕をイメージしたものだ。

重い音を立てて鉄柵が開き、初老の執事が入場を促す。一定の距離間で立っている使用人たちが僕に不審の眼差しを向けるが、どこ吹く風と歩を進める。アイリスから話しはいつているので、手を出してくる者はいない。

雑草が生い茂る荒涼とした庭を進み、屋敷の門へ辿り着く。到達と同時に扉は開き、内装が明らかになる。やはり内装も全体的に暗い色調だ。僕の隣のアイリスはうんざりした顔で正面の扉を開ける。そこには十数人の老人が集まっていた。

「ようやく戻ったな、アイリス。五年前の召集のときといい、行動が遅いのではないか？」

正面、最も置くに座る厳しい顔の男性が口を開く。肘を机につき、不愉快そうな目でアイリスを見ている。

「そうかな？ 私は普通に電車を乗り継いできただけだ。早く来いというのなら、ジェット機でも用意してくれ」

アイリスはそんな目にしれっと答える。彼女の言葉に十数人の老

人たち全員が視線をきつくするが、本人は気にした様子はない。

「……まあいい。アイリス。席に着け。で、その者がそうなのか？」

「ああ。彼こそ「終末の錬金術師」と呼ばれる礼装師、ルシアだ。今回は我が家に興味があるということで私が招いた」

アイリスが僕の名前を出したので、フードを外し、顔を顕わにする。

「紹介に預かりました。僕は「終末の錬金術師」ルシアです。このたびは我が友、アイリス・マリア・ヘルブストの招待にあやかりました」

十数人の老人たちはざわめき始める。「あんな若造が……」「アイリスの友だと……?」「上手くすれば家に……」「様々な思惑が錯綜しているらしい。

「静かにしろ……」

重い声が部屋中に響く。アイリスを嗜めた、一番奥の男だ。

「私はハルト・ヴァール・ヘルブスト。貴殿を歓迎しよう、終末の錬金術師」

パン！パン！

とハルト・ヴァールは手を打ち鳴らした。すると先ほど通った後ろのドアが開き、メイドが入ってくる。

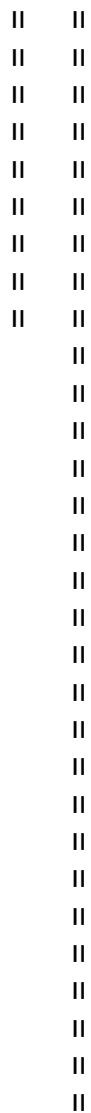
「その方を客間に案内しろ。粗相のないようにな」

「かしこまりました」

ハルト・ヴァールの言葉にメイドが答え、僕について来るように促した。

流石に重要な案件を抱えるこの場に、このまま止まってはならないことは分かっていたので、僕はメイドについて部屋を出る。

重苦しい空気を遮断するかのように後ろのドアが閉まった。



「五年後の魔宴の参加者はお前だ」

アイリスの祖父、ハルト・ヴァール・ヘルブストが彼女に告げた。
「・・・了解した」

アイリスには魔宴を戦う意味などない。しかしそれとは別に、逃れようのない引力が彼女を捉えているのも事実だった。

何もヘルブスト家の権力そのものに脅えているわけではない。彼女の父親は前回の魔宴に参加した。しかし、百年に一人の天才と呼ばれていた彼は「最弱」と蔑まれている「闇」に敗北したのだ。まあ、実際のところ、「闇」の参加者が一万年に一人の天才だったというだけの話だったのだが。しかしその事實はヘルブスト家の多くの人間の虚栄心を打ち砕いた。そして行き場のなくなった鬱憤はアイリスと彼女の母に集中したのだ。そして彼女の母は心を病み、身体を病み、死んでしまった。

だからこそアイリスはヘルブスト家を恨み、魔宴を恨んでいる。それから逃げることなどできようはずもない。ここで彼女が逃避を選んだのなら、彼女の心には耐え難い恥辱が渦巻くことだろう。

嫌なら、遠ざければいい。人はよくそう言う。しかしそれは「嘆き」を抱える人間にとっては耐えがたい苦痛なのだ。彼女のような人間は苦痛から逃れるために更なる苦痛へ飛び込み続けなければならない。

彼女の了承を一度首肯して受け取ったハルト・ヴァールは手元にあるボタンを押した。特に音が鳴ったわけでもなかったが、彼のすぐ横のドアから初老の執事が入室する。

鉄柵のような門の前でアイリスとルシアを出迎えた男だった。ハルト・ヴァールの側近だ。

彼は一抱えもある金属の箱を一番手前の老人の前におく。老人は懐からカギを取り出し、箱の側面についた鍵穴に差し込んで回す。ガチリと音がして、箱は次の老人に回される。

そして最後にハルト・ヴァールが箱の上面の中心にある一際でかい鍵穴にカギを差し込み、回した。彼はそのまま箱の上面を持ち上げ、はずす。

中から出てきたのは一冊の魔導書。「滅」の参加者が魔宴で使う<滅び逝く患者どもの挽歌>だ。

ハルト・ヴァールから魔導書を受け取った初老の執事がアイリスに魔導書を差し出す。

「お受け取り下さい。お嬢様」

アイリスは執事を一瞥し、魔導書を受け取った。

「では、今回の案件はこれで全て終了した。何か追加で意見のある者はいるか？」

老人たちは全員微動だにしない。

「閉幕とする。アイリスはこの場に残れ。話がある」

老人たちが去って行った室内に、アイリスとハルト・ヴァール、そして執事が残される。

「奴を力づくで引き込むことは可能か？」

やはりきたか　とアイリスは思った。彼と一緒にヘルブスト家について来るといった瞬間からこの問いは決まっていたも同然だった。それほど「終末の錬金術師」のネームヴァリユーは大きい。

「……無理だな。あいつ自身の力でさえ、私と同程度はある。」

それに奴に付き従う四人の騎士たち……彼を力で屈服させようとするならヘルブスト家の全勢力を挙げて立ち向かわねばならんだらう」

アイリスは嘘をついた。彼の力はヘルブスト家で抑えられるようなものではない。それこそ、四神龍の一体が抑えられればいいほうだ。

「そうか。ではお前が引き込め、アイリス。お前は母に似て見目だけはいいからな。それに、お前は魔宴に参加するのだ。その前に次代を残す義務がある」

アイリスは指を握りこみ、歯を食いしばって殴りかかりそうな心を押しさえ込んだ。

アイリスはこの世界で一人だけ、ルシアだけは心から信頼していた。彼は裏切らない。自分が道をそれたら彼は自分を討ちに来るだらう。それが私の救いとなるから。

彼女が辛い鍛錬の中でくじけそうになった時も、無表情で飄々と修業の準備をする彼の姿にずいぶん救われたものだ。

その彼が、彼女の家の老害たちの欲の矛先を向けられるのは、彼女自身我慢ならなかった。彼女が自身の家を憎んでいるという意味でも、彼を心から信頼しているという意味でも。

「まあ、善処はしよう。あいつがそんな稚拙な計略に嵌るとは思えんが」

「せいぜい私を失望させるなよ、アイリス。貴様の父親と同じようにはな」

アイリスはいっそう強く拳を握り締めた。爪が食い込んで血が滲む。

「もうお前に話すことはない。さっさと去れ……」

アイリスはぎこちなく一礼し、退室する。顔には陰しさが見て取れない。

「彼女のためですか？」

（ああ。アイリスの命はそう長くない。今すぐ死ぬというほどでもないが、どうペース配分しても五年の内には限界が来るだろう。その時僕は、彼女を救うよ。それが僕のエゴだ。彼女が後でなんと言おうとも、生きていてもらう）

この五年で僕が培ったのは戦闘技術、戦闘力、礼装製造、そして最後に「蘇生」だ。

「蘇生」と言っても何のことはない。僕の身体は魔力でできている。それを他人に結合させるだけだ。もつとも、魔力の質を僕が微細に調節し、うまく相手に結合させないといけない。僕の身体をかじったからといって、僕の力が得られるわけでもない。

実験段階では死にかけの蝶が半年生き続けた。結合させる量の調節によつては不死性は得られずとも、不老くらいにはなるだろう。

僕はそれを、彼女にするつもりだ。

立食会の会場は流石に明るかった。天井からつるされたシャンデリアが部屋中に光をばら撒き、鮮やかな壁がそれを反射する。食事が乗る食器は全て銀で、湯気の立つ料理はどれも一級品だ。僕の横には案内ということであのメイドがついている。

「我が同胞たちよ。久々の再開を楽しもうではないか」

壇上ではハルト・ヴァールが開式の挨拶をしている。横にはシツクなドレスを着たアイリスが控え、壇に花を添えていた。

「本日は素晴らしいゲストをお迎えしている。「終末の錬金術師」ルシア殿。壇上に上がってきてもらえるかな？」

僕は壇上に上がる。僕に摩擦を起こすわけにも行くまい。

いま、僕の格好は黒のスーツだ。それに貫禄が必要かなと思ったので、髪をオールバックにして首の後ろで結んでいる。これなら男に見えるはずだ。

壇上上がった僕はアイリスの前を通り過ぎてハルト・ヴァールと握手を交わす。周囲から「おお・・・」と驚く声が聞こえる。

そして僕はハルト・ヴァールからピンマイクをうけとって語りだした。

「僕は「終末の錬金術師」、ルシアです。今日はヘルブスト家に挨拶に立ち寄らせてもらいました。そしてこのような立食会に参加させていただき、感謝しています」

僕は当たり障りのない挨拶を済ませ、マイクをハルト・ヴァールに返した。

「それでは食事を始めてくれ」

ハルト・ヴァールのその言葉に、集まった人々は動き始めた。

僕は数分としないうちに人に囲まれた。単に挨拶に来るものだったり、娘を紹介しに来たり様々だが、分かったことはヘルブスト家には幾つもの分家があるということだ。

<八祖の禍家>が指すとおり、魔乖術師の家系の頂点には八つの家が存在し、その下には彼らに付き従う幾つもの分家が存在する。力のない分家ほど権力を強く欲し、こういう多くの家が集まる場では積極的なデモンストレーションを行う。

僕に人が集まったのも、僕をヘルブストの家系に取り込めたら、本家からの目という意味でも、家の力という意味でも評価が上がるということなのだろう。しつこく縁談を求められた。

そして連れられている女性たちもその状況に疑問を抱いていない。実家に権力をもたらすことこそが最重要だと教育されているのだろう。つまらないな。

当たり前障りのない言葉で彼らをかわし、僕は食事が始まってからずっと隅で腕を組んでいるアイリスに近づいた。

「はい」

そして持っている皿の片方をわたす。

「あ、ああ。感謝する」

アイリスは皿を受け取るとフォークを手にとってサラダを口に運び始めた。

「綺麗だよ。アイリス」

僕はそんな無関心そうなアイリスに言ってみる。

「ぶふっ！」

アイリスの両頬が不自然に膨らむ。口からは少し空気が漏れた。

「む・・むぐぐ、むぐむぐ・・（ゴクン）」

彼女はすごい勢いで野菜を噛み砕き、飲み込んだ。顔が赤くなっている。

「い・・いきなり、なな何を言うのだ！」

彼女は褒められることに慣れていないので、結構面白かったりする。

「何って・・・感想？」

アイリスが綺麗なのは本当だ。今日のドレスは彼女の印象にピッタリあっていて、魅力を何倍にも引き上げている感じた。

「あ・・ありがとう」

彼女は目を逸らしながら言う。

「お前は・・めんどくさい奴なのだな・・・」

花も恥らうというのはいささか言っているのだから。僕はそれほどじゃないが、こういう表情を見られるのならたまにはいいな。

「それで、僕はどうか？結構イメチェンしてると思うんだけど？」

アイリスは僕の方をちらちらと見て、「う・・似合ってるんじゃないか？」とこぼした。

立食会が終わり、用意された部屋に戻ってきた。シャワーを浴びると、棚にバスローブがあったので、今日はこれで寝るということだろうと納得し、羽織る。

立食会はなかなか長く続いたため、既に時間は十二時をまわってしまっている。僕はおとなしく寝ようとベッドに入ったが……

ギイイ……

という音で、何者かが入ってきたことを察した。

入ってきたのは今日何度か会ったメイドだった。

「伽に参りました」

と彼女は言う。

「は？」

と間抜けな声を出した僕は悪くないと思う。

「何で？」

「それが私の仕事だから……でしょうか」

彼女は虚ろな目で言う。何も感じていない……いや何も感じないようにしているのか。

「それで……君は納得しているのかな？」

「……」

メイドは押し黙る。やはり、納得しているわけじゃないんだな。

「もう一度聞こう。納得しているのかな？」

「……ないわ」

メイドはかすめるような声で答える。

「納得できるわけないわ……。私だって、人並みに恋がしたいって思うし、憧れてる。でも、仕方がないの……」

心の中で何かが決壊したのか、彼女は語り始めた。

彼女はヘルブスト家の分家の生まれだったが、魔乖術の才能を見出されなかった。そこでヘルブスト家本家に奉公に出された。奉公といえは聞こえはいいが、その実態は単なる奴隷……時としてモルモットにもされる運命だ。

今まで泣き叫びながら死んでいくメイドたちを何人も見てきた。そして今回は自分の番。彼女は僕に抱かれるならまだましと決心を決めて今日一日接してきた……らしい。

まためんどくさい家だな、と僕は思う。いつそ魔乖術師の家を根絶させればいいんじゃないかとも思うが、自重。なまじ力があるとこんなことばかり浮かんでくる。嫌じゃないけど。

「そう……じゃあこんなのもやったことないんじゃない？」
僕はそう言っつてPSPを取り出した。彼女に見えないようにして自分の身体の中から。彼女は会話のつながり方が分からず、キョトンとしている。

「え……あ、はい？」

「これ、知ってる？」

「え？いえ、知りません……」

「日本で開発されてるゲーム機なんだけど、やってみない？」

ベッドではメイドさんが眠っている。彼女はほぼ徹夜でゲームを続けた。僕は寝る必要とか特にないから付き合えたし、今も起きているけど、彼女にはきつかったようだ。BGMが流れるPSPを止め、部屋を出る。

そしてハルト・ヴァールの執務室を訪れた。ドアをノックする。

「開いておるぞ」

僕はその言葉を待つて入室する。広い部屋の中心にデスクが置かれ、壁には一面に本が敷き詰められた部屋だ。

「おお、貴殿だったか。して、何の用かな？」

「いえ、今日ここを発とうと思っっているので、挨拶に」

「もつとゆっくりしていてもかまわんのだが……」

「僕にもしたいことがありますから」

「して、私からの贈り物はどうでしたかな？」

ハルト・ヴァールはニヤニヤしながら聞いてくる。僕はしめたと
思っただ。僕から切り出そうと思っただことだったからだ。

「？ああ。なかなか良かったですよ」

「あれは処女だからな。さぞいい声で鳴いたことだろう。気に入ったのなら差し上げますか？」

「それは願ってもないことですね。対人用に試してみたい術式も
ちよつどありますし。いや、人を攫うのは簡単ですけどももらえるの
ならそれに越したことはありませんからね」

僕はわざとハルト・ヴァールと同じ穴のムジナを気取る。警戒心
を解くためだ。ギブアンドテイクでどうとでもなる人間になりきる。

「そういうことなら、もう少し色をつけましょう。処女ですぞ」

「いや、結構なことですね。処女かそうでないかというのは術に
も影響してきますからね。ああ、それと僕がここに来たのは貴方に
これをわたすためです」

僕は懐から三十センチくらいの銀製の杖を取り出した。

「それは？」

「魔乖咒の第四咒法2、3回分の魔力を蓄えておけ、術の発動速
度を速める効果を持った魔杖です。出会いを祝してということでは、
差し上げます」

ハルト・ヴァールは杖を僕から受け取り、監察した。

「いいのですかな？貴方の作品はかなり値が張るでしょうに」

「いいですよ。ヘルブスト家は僕の作品をかなり買ってくれてま
すからね。今後ともご贖員に。では……」

「ええ。ではこちらのほうは十時までには準備をさせます。エントランスでお待ちください」

そして十時。エントランスには暗い部屋にいた十数人の老人とアイリス、そして十人程度のメイドがいた。ハルト・ヴァールが進み出てくる。

「時間通りですな、ルシア殿。モノは相談なのですが・・・ウチのアイリスも貴殿の旅に連れて行ってはくれませんか？」

「いいですよ。とくに他人がいて困るということもないですし」

「そうですか。いや、よかった。アイリス。粗相のないようにな
アイリスはひたすら不快そうな目をハルト・ヴァールに向けるが、
建前だけは頷いている。

「じゃあ、失礼しますよ」

僕はそう言ってヘルブストア家を後にした。

「あの・・・ルシア様。私たちは、いったいどうなったのでしょうか？」

徹夜でゲームをし続けたメイドが目を赤くしながら聞いてくる。

「ハルト・ヴァールから貰ったんだよ。実験に使うとか言って」

僕がそう言うと。メイドたちはいつきに暗い顔になる。そしてアイリスは険しい顔をこちらに向ける。

「貴様・・・いったい我が家で何をしていた。酒池肉林でもつくりあげたいのか？」

「まあ、それは建前で、昨日あんなことを聞いたからさ。助けて

みようと思ったわけです。はい。お金も今まで僕が荒稼ぎしたものをあげるし、どこへなりとでも行けばいいよ。魔乖術師が少ないから日本がオススメといえばそうかな」

僕はその言葉にメイドたちは顔を輝かせる。

「な・・なるほど。そういうことか」

いづらか電車を乗り継いだ先で、メイドたちとは別れた。しかし、ゲームを続けていたメイドだけはなぜか戻ってきて言った。

「あなたについていくのは駄目ですか？」

その時だった。腰のカードホルダーが光り、オパールが現れる。

「駄目です！！ルシア様のメイドは私一人でいいんです！」

オパールは僕にしがみついてメイドを睨み、「フリー！フリー！」と威嚇する。そしてそんな様子を見たメイドは言った。

「ちえー、もういたのか。じゃーねー」

こんどこそメイドは去っていった。

そのあとオパールが自分の言ったことに気づき、「すすすすみません！」と取り乱し、半日ほど使い物にならなくなったのは彼女の黒歴史である。

ボクヨル第四話 絶端（後書き）

最後の方はなんだか燃え尽きた感じ。ドラゴンドライブの設定が薄くなってきた気がしたので前半にちょこっと入れました。

ボクヨル第五話 「滅」 Absolute (前書き)

書きあがったものを投稿し、自分で読んでみたのですが、まずい、二次創作どころの話じゃない、盗作だろこれ、と感じたので、二話に分かれていたのを統合し、原作と関わるところはオリジナル要素の特に強い部分のみ掲載することになりました。その分中身がスカスカになっております。でも後半は頑張ったつもり。

得ることになるだろう。

「お前は・・・最後まで私のことを「友」と呼ぶのだな・・・」
アイリスはゆっくりと顔を伏せた。

彼女と行動を共にし、既に十年が経つ。僕が彼女の心の拠り所となっていることは理解している。

僕の力は彼女を圧倒する。僕がその気ならアイリスを引き止めることも容易い。力でも、言葉でも止められる。しかし僕はそれをしてない。

仮に、僕がさっきの「友」という言葉の変わりに「愛」を囁いたらどうなったのだろうか？何も変わりはない、それどころか魔宴へ向かう彼女を苦しめるだろう。それに僕自身、もう二十五年くらい生きたが、いまだに「家族」というものが理解できない。理解できないものを語ることは僕にはできない。

「だが・・・それでいい。お前はいつも私に一番重要なことを語ってくれる」

彼女の命は残りわずか。このく魔宴を戦い抜けるかどうかすら分からない。何の憂いもなくただ戦いを、過去の清算を。それが彼女にとって今、一番重要なのだ。

そしてアイリスは顔を上げた。眼光は戦士のそれだ。

「私は「滅」ではなく、お前の為に戦おう！我が友、ルシアに必ずや勝利と栄光を捧げてみせる！」

アイリスはそう宣言すると、鮮やかに身をひるがえして去っていく。その背中に迷いは見られない。

「ついに始まりましたね・・・ルシア様」

アイリスが去った花園、そこにはいつの間にか四神龍が現れている。その中からオパールが近づいてきた。

「うん。悲しいね、運命に翻弄されて戦う者の姿は」

「しかしあなたは止めなかった。それがもつとも彼女のためであると、そう思ったから」

「間違っていたと思うかい？」

「今の時代の一般的価値観では、ルシア様の言葉は間違いでしょう……しかし、何かと戦う者にとっては救いとなったのではないでしょうか。今、誰もがそれを見続けることに耐え切れず、軽々しい発現で相手を傷つける。ルシア様はそれをしなかった。誇るべきです」

オパールは僕が傷ついているか、そっと手をとる。

「別に誇るも何もないさ。これが僕だったということ。幸せだらけの夢想の世界よりも現実に必要なのかを考える。僕は今までそうして生きてきたのだから」

「ルシア様？」

オパールは僕の意見をいぶかしむ。そりゃそうだ。彼女は僕を真龍、または元龍と思っているのだから。

「いや……何でもなし。過去のことだ。彼女を見ていて思い出してしまっただけさ。理不尽に抗い続ける記憶を」

オパールはその言葉にいつそう疑問符を浮かべる。

さて、僕の方も動かないとな……。

僕は五年ぶりにヘルブスト家に足を運ぶこととなる。

@@
@@@@@@@@@@@@

【 原作保護のため、戦闘シーンはスキップします。原作外のこの小説独自の部分のみ掲載。】

ナイトはたった二人の親友に別れを済ませ、家に向かっていった。家には「闇」として<魔宴>に参加しているヨルミルミ・シュトレンベルグが待っているだろう。ナイトは今朝、<魔女獵人>のアイリス・マリアに言われた言葉を思い出す。

「たいした正義だな。だが、そんなものは所詮エゴにすぎない。ただの自己満足だ」

そんなことは分かっている。

ナイトは少しづつ昔であった少女たちのことを思い出していた。記憶の中の少女たちはナイトに優しい言葉をかけるのだが、それは決して都合のいい言葉というわけではなかった。

青い髪の少女がナイトに語りかける。「世界には醜い欲があふれている。それを打ち払いたいのなら、やはり自分の力がものをいうけど忘れてはいけない。それもまた君の欲だということを」

今度は金髪の少女がナイトに諭す。「あなたが世界に正当性を望むのも、また一つのあなたのエゴ。でも納得できないというのなら、それを突き通してみなさい。そして勝ち取るのよ」

二人の少女が言っているのは同じことだ。正義とは、口に出すことではない。心に抱くものなのだ。正義すらも自らのエゴ、欲の類であり、人を救うために人を踏み躪る、そういう類のものなのだ。彼女らは最後まで全員で幸せになりましたよなんてことは言わ

なかった。

俺はヨルが一人で傷ついていく様を見ていられない。

彼女はこれから血みどろの〈魔宴〉に踏み込んでいこうとしている。ナイトはそんな彼女を放つてはおけない。いくら「滅」が「最強」と呼ばれていようが、そこから逃げ出すことはしたくなかった。

いや、「滅」だけではない。〈魔女獵人〉の方もどうやっているのだから、魔乖術師に匹敵する戦闘力を有しているらしい。そしてナイトには〈魔女獵人〉に心当たりがあった。昨日街で出会った少女とつれの男性。すさまじい存在感だった。

そして今、ナイトたち「闇」、「滅」そして〈魔女獵人〉。三つ巴の睨みあいがいまだ継続中なのだ。今日、ナイトたちは打つて出るつもりだが、気を抜けば誰かが漁夫の利を得ることも容易に想像できるこの状況、ナイトは気を引き締めて竹刀袋の中の日本刀を握り締めた。

戦闘前、ナイトが友人に別れを告げに行き、帰ってくるシーン。
原作外。

だがナイトは狩人の攻撃に反応していた。流れるように左手に持っていた日本刀「陽蘭」を抜刀し、マシユの剣を受け流した。そしてアイリスに牽制の一閃を振るい、同時にヨルの体を掴んで獵人たちの距離を離れた。

ナイトは本心気が気でなかった。刃を合わせた瞬間分かったのだ。自分はマシューに及ばないと。

祖父から剣の手解きを受けてきたナイトだったが、未だ世界の名だたる猛者たちと戦ったことはなかった。言ってみれば、どれだけ厳しかろうとナイトが行ってきたのは「稽古」の範疇だったわけだ。真に技を高めるのは実戦。ナイトがマシューに及ばない理由でもあった。

戦闘中、開始直後の攻防。相違点はナイト君が刀を持っていること。

ヨルはアイリスを危険視し始めていた。何だあの魔乖咒に対する耐性は。尋常じゃない。第一、第二咒法くらいじゃびくともしない。第三咒法でも太刀打ちできまい。第四咒法にありったけの魔力をこめれば、そんなレベルだ。

「気になるのかな？私に魔乖咒が効いていないことが」
ヨルの視線に気がついたのか、アイリスが声をかける。

「この腕輪とチョーカーは「ルシアの作品」だね。そんじよそこの礼装とは桁が違うのだよ」

「ルシアにはどうだか分からないけど……」

一瞬、何かナイトの頭の中を駆け巡った。それは頭の片隅に置き忘れているような違和感。

「なっ！」「終末の錬金術師」の！」

しかしヨルの声に意識を戻す。

「終末の錬金術師？」

また聞きなれない言葉だ。ナイトはヨルに聞き返した。

「七年前くらいにふいに現れて、五年前には最高の礼装師として名前が上がるようになった人物よ。私のこのタリスマンには、魔乖咒の力を増幅させる働きがあるのは話したわよね」

「ああ」

「これも「終末の錬金術師」の作品。彼の作品は持っているだけで戦況を覆すよなものばかりよ。私のこれは一昔前のだけど、それでも攻性魔乖咒の威力を50%増大させるわ」

1.5倍。それがどれほどのものかはナイトにも分かった。しかも、持っているだけで何の代償もなくそうなのだとしたら、驚くべき効果だろう。

「今や「終末の錬金術師」の礼装を持つことは一流の魔乖術師のステータスとっていいわ。それを三つ、しかも珍しい耐魔乖術礼装なんて、いったいいくらかけたのかしら。それに私も彼の作品集を見たことあるけど、あんなデザインのものは知らない。もしかして新作!？」

「へえ、そんなに高いのか？」

傷が回復し、余裕の出てきたナイトがヨルに聞いた。

「ええ。この私のタリスマンでも100億したわ。彼女がつけているのは……500億はくだらないでしょうね」

「ご、ごひやく!!」

「もちろん一つで、単位はユーロよ。単純に考えて1500億以上かかっているわ」

とんでもない額である。小市民であるナイトは絶句するしかなかった。解説したヨルは「何で獵人があんなもん持つてんのよ……わたしだって本当はあと杖のシリーズが……」とブツブツ呟き始めた。

アイリスは鼻をとくいげに鳴らして、ヨルに見せ付けるように腕

を動かした。ヨルはものすごい表情でアイリスを睨む。ナイトは、何だか締まらなくなってきたなと嘆息した。

ナイトはアイリスの礼装を見る。ヨルのタリスマンも綺麗だがアイリスの腕輪は輪をかけて綺麗だ。銀の美しい曲線を描くカットに金のワンポイント、美術品としても法外な値がつくことになるだろう。チョーカーは今首に隠れて見えないが、は見えないが、同じようなものだろう。

「へえ、そいつの名前はおれも聞いたことがあるぜ。「終末の錬金術師」様ってな。つか、おまえそんなもんつけてたのかよ。どこで手に入れたんだ？」

ナイトの傷が治っていく様を呆けてみていたマシューが口を開いた。アイリスはとにかく不快だった。なぜこいつの口からルシアの存在が語られるのだ。衝動的に殺しそうになった。

「企業秘密だ。私も命が惜しいのでね。知っているだろう？彼が「終末の錬金術」と呼ばれている所以を」

「ああ。彼の所在を追った者はどんな優秀な魔乖術師だろうが剣豪だろうが死ぬってな」

「その通りだ。そして彼を追って命を落とした者の中には私より強かった者の名前も多数あった。そんな者たちがスタボロにされて死んでいるのだ。追いたいとは思わんし、それに関することをしゃべろうとも思わん」

「なるほどね。そりゃ懸命なことだ」

「さて、こうして話している間に彼らは万全準備を整えてしまったようだ。仕切りなおしだな」

アイリスはその場で足を前後に開いて構える。

「ああ!!!」

マシューは返事と共にナイトに切りかかった。

戦闘中、いったん手を止めての会話。ルシアの礼装がかかわるシ

ーン。

身長二メートルを越える怪人がナイトに襲い掛かる。その四肢は驚くほどに細く、長く、白い。ナイトは死人のようだと思った。「滅」系統第二咒法<滅びを突き進む狂戦士>を発動させたアイリスは、数日前見た怪人に姿を変えていた。

アイリスの拳がナイトの刀「陽蘭」の剣先を奪い、残った半分ほどの刀身を歪ませる。ナイトは正直この刀でよかつたと思った。並の刀なら、刀身と同時に自分も吹き飛んでいることだろう。だが、この刀が刀身の半分を失ってしまったのがナイトの腕の未熟さということは彼自身が理解していた。

「ナイト！もつと距離をとりなさい！「滅」の攻撃に防御なんて意味ないわ！その刀が特殊な造りで助かっていただけよ！挽肉になりたいの！？」

確かに、先ほどアイリスの拳が叩き込まれた車は鉄片となって吹き飛んだ。あの攻撃をまともに受ければ、人間など言葉通り挽肉になるだろう。ナイトは距離をとって牽制しながら攻撃をやり過ごすことにした。

「ああもう、なんでこんなことになったんだよ」

ナイトは迫り来るアイリスを見て毒つく。無性に悲しく、彼女から目を逸らしてしまいたかった。

本性を現したアイリスのシーン。原作とは違い、ナイト君が刀で

「滅」の攻撃を受ける。

「終末の錬金術師」の礼装を三つもしてるなんて予想外だけど、砕いてみせるわ。〈闇扉より現れ消える射手〉

ヨルの手の内からすさまじい閃光が放たれる。それは「滅」を包み込み、射線上のすべてのものを破壊しつくす。しかし、その中でも「滅」は健在だった。

「あれでもダメなのか？」

ナイトは背筋が冷えた。

その時、バキ・・と音がして、何かが地面に落下した。

「な！？こんな遠距離から「ルシア」の腕輪を破ったというのか！？」

それまで冷静だったアイリスが驚愕に目を見開く。

第二射がヨルから放たれる。やはりまた礼装が砕け、地に落ちる。アイリスはその様を悔しげに見つめている。

礼装を砕かれたアイリスのシーン。壊れたルシアの腕輪を悲しむ。

アイリスは力任せの膨大な魔力でナイトたちに襲い掛かる。ナイトはその中で、一種走馬灯のようなものを見ていた。

師匠との組み手でドロドロになり、先生の魔乖咒の授業で精根尽き果てたナイトだったが、師匠が差し出したアイスですぐに元気が戻ってきた。

ベンチに三人で座ってアイスをなめる。

「師匠は強いよな。何やってたんだ？」

ナイトは右に座っている師匠にたずねてみる。師匠は自分に教えているものの詳細を明らかにしない。空手かと思いきや、ボクシングだったり、柔術が入ったり、なんでもありと言えば総合格闘技を思い出すが、やはりどこか違う気がする。先生は魔法使いだけど、師匠の方は何者なのか。先日ナイトの胸を素通りした黒い腕といい、ナイトは師匠の正体をつかみきれしていない。

「自衛隊」

予想外の答えが返ってきた。十歳の女の子が自衛隊？笑い話にもならない。

「クク・・・冗談だよ」

師匠はそう言って眉をひそめる。またこの人の正体が分からなくなつた。

「それはそうとナイト、最近学校の方はどうなの？」

左側の先生が聞いてくる。

「・・・相変わらずだよ」

「・・・そう」

ナイトへの無視は未だ続いていた。学校に行くたびに、ナイトは悲しくなる。

「学校か。僕がぶっ壊してあげようか？」

あまりにも綺麗な笑顔で師匠は言う。ナイトは彼女なら本気でやると思った。

「ちよっ！止めてよ！」

「冗談だよ。流石の僕もそんなことはしない」

じゃあどんなことだったらやるのだろうか。ナイトは頭を痛めた。そんなナイトに師匠と先生は微笑んで言う。

「「頑張つて」」

思い出した。ナイトは過去に忘れていたことをすべて思い出した。青い髪の師匠と金髪の先生、ナイトは彼女たちに力をもらった。

ナイト君の回想シーン。

アイリスの魔力が膨れ上がる。彼女の第四咒法は力を増大させ、ナイトを飲み込もうとする。その時だった。

「ナイト！！！」

ヨルの声がナイトに届いた。そしてタリスマンが投げ渡される。ナイトは魔乖咒を撃っていない左手でキャッチした。魔力を注ぐ必要はない。既に起動していた。

ナイトの第四咒法の威力が、礼装によって桁違いに高まる。それは容易にアイリスを押し返し、彼女を飲み込んだ。バキンという音とともにナイトは最後の耐魔乖咒礼装が砕かれたこと悟った。

アイリスに勝利するシーン。原作とは違い、タリスマンで攻撃力アップ

以上です。

@@
@@
@@@@@@@@@@@@@@@@

魔宴の第一幕、「闇」対「滅」の勝負を僕は全てを傍観していた。数日前、アイリスが「闇」の参加者に襲い掛かるのも、ナイトに忠告するのも、そしてアイリスがナイトの第四咒法に打ち碎かれるのも。

僕は、見下ろしていたビルから飛び降り、倒れたまま動かないアイリスの隣に降り立つ。

「ルビーン、パルレ、オパール、ザファイア。結界を頼む」

僕は四神龍たちに指示し、アイリスの周りに結界を張らせる。アイリスの周囲にピラミッド型の青白い結界が輝く。これでひとまず、

彼女は死ぬまい。僕は当然の闖入者に呆けるナイト君と「闇」を横目にアイリスをその場で抱き上げた。

彼女は紅い布に頭の先まで包まれている。既に第二呪法は解け、小柄な身体を横たえていた。

「ん……私は、負けたのか……？」

「ああ。ナイト君に正面から打ち砕かれて負けた」

僕のその言葉に、彼女は身体をもぞもぞと動かし、「そうか」とだけ言った。

「お前は、見ていたのだな、全て」

「うん」

「すまないな。お前に勝利を捧げると言ったのに……まさか最初に脱落するのが私とは。それにせつかくお前が作ってくれた礼装も全て砕かれてしまった」

正直、僕は彼女が魔宴に勝ち残るとは思っていなかった。だが、こんなに早くに敗北するとも思っていなかったけど……

「ナイト君が「闇」と一緒にいるのを見たとき、こうなるんじゃないかというのはうすうす思っていたよ。アイリスは優しいからね」

「よせ。これは過去を断ち切れなかった私の甘さだ」

僕はアイリスの顔を隠している布を外そうとする。彼女はそれに気がついたのか、抵抗するように布を握るが、弱っている彼女の腕では僕に抵抗しようもない。僕は力任せに剥ぎ取った。

「よ！よせ！」

「滅」系統第四呪法をその身に受けた彼女はポロポロだった。髪は右半分が抜けかけ、左のまぶたは腐敗して眼球がギョロリとむき出しになり、頬はそぎとられて奥歯の歯茎が顕わになっている。

アイリスは僕が剥ぎ取った布を急いで奪い返し、急いで被る。

「バカ！なんてことをしてくれただ！お前にだけは……お前にだけは見られなくなかった。こんな醜い、朽ち行く私の姿を……」

アイリスは全身に力を入れて縮こまり、僕に背を向ける。

「綺麗だよ。アイリス」

だが、僕のその言葉に前身が弛緩するのが分かった。体勢としてはさらに縮こまっているが。

「それに君は朽ち行くと聞いたけど、僕は君を朽ちさせる気なんてないんだよ」

「なに？それはどういう・・・もがっ！」

僕は薬品の染み込ませてあるハンカチをアイリスの鼻の部分にあてがう。彼女は意識を失ったのか、ぐったりとその場に力なく横たわる。

「これからは僕のエゴ、君はエゴを押し通すことをナイト君に教えた。僕はあんまりそういうことはしないけど、今日は特別。そのために、僕も準備を進めていたのだからね」

さて、早々に蘇生を始めたけれど、「闇」が残りわずかな魔力を収束していることが分かる。そんなんでこうなるわけでもないけど、邪魔立ては無用に願いたい。あの結界がある限りアイリスは大丈夫だ。僕はナイト君たちに向き直る。

「久しぶりだね。ナイト君」

「し・・・師匠？」

ナイト君は僕の顔を見て呆けている。

「僕の青いこの髪を忘れたかな？こんな髪の色をしているのはめずらしいと思うんだけど」

「ナイト、知り合い？誰なの？」

「闇」はナイト君に尋ねた。この闖入者は一体誰なのか、見方なのか、敵なのか。

「俺の、師匠だ。昔先生と共に俺を鍛えてくれた」

「魔乖術師なの？」

「いや、そうじゃなかったはずだ。俺が師匠から教わったのは格闘技、だけど、何らかの力は持っていると思う」

ナイト君は僕の「腕」を見ているからね。まあ、正体を明かすに

はこれかな。

「「闇」のあなたには「終末の錬金術師」の方が通りがいいんじゃないかな？」

「「え？」」

二人は同時に間抜けな声を上げる。「闇」はあまりの予想外の人物に集めていた魔力を霧散させていた。

「そう。君たちを追い込んだのも僕の作品なら、君たちの窮地を救ったのも僕の作品だ」

「その「終末の錬金術師」が、私たちに何の用かしら？」

僕の噂を知っているのだろう。「闇」は警戒の目線を向けてくる。

「ああ、君たち「闇」の魔乖術師が僕を探ったなんてことはないよ。ここに顔を出したのはまったくの別件さ」

その時、「闇」は何かを思い出したようだった。

「そういえば、「滅」はあなたと知り合いのようなことを何回かしゃべっていたけど、もしかして彼女を助けに来たのかしら？」

「それは、どうなんだろうね。確かに今、僕の指示で僕の作った魔導具による結界で彼女の死を一時的に止めてはいる。だけど、敗北した以上、彼女の魔宴はここまでだ」

そしてナイト君はその「魔宴」という言葉にすぐさま反応した。

「師匠は、全て知っていたのか？」

僕は首肯する。

「だったらなんで先生を止めてくれなかった！あんなすごい魔導具が造れるならとめることだってできたはずだ！」

ナイト君はその場でいきりたって恫喝する。

「確かに、僕が戦えばアイリスをとめることはできる。けど、それがいつたい何になる」

「え？」と、ナイト君はまた呆けた。

「この戦いで君は知ったはずだ。アイリスの心に秘めた想いを。

彼女は魔宴から逃げることでできない。確かに、彼女に「魔王」の名誉を求めるような欲はない。戦いたいと思っているわけでもな

いだらう。だが、それとは別に彼女は魔宴から目を逸らせない。それは怒りだ。彼女は自分の父親が魔宴で死んだことには納得している。だが、母の死と自分への罵声。それに懊悩して生きてくる間に彼女はそれ以外の生き方ができなくなつた。少なくともこの戦いに参加し、勝敗を決すまでは、何も変えられない」

「でも！」

「やめなさい」

ナイト君はまだ続けようとしているようだ。しかし、「闇」が彼を止める。

「私には彼女たちの気持ちがなんとなく分かるわ。それに、「終末の錬金術師」が何の躊躇もなく「滅」を送り出したとは限らないじゃない。話しを聞いている限り、彼女もいろいろ考えていたはずよ」

「闇」のその言葉にナイト君はバツの悪い顔をして僕から目を逸らした。

「僕がここに来た理由を明かしておくよ。僕はここに来る前、ヘルプスト家の屋敷に行った。そこでこういう約束を交わした。「魔宴が終了、もしくは「滅」が負けたとき、アイリス・マリア・ヘルプストの身柄を貰い受ける」理由を聞かれたが、礼装の研究に使うと言つたらすぐに許可が下りたよ」

「師匠!!!」

僕の言葉がきにくわないのだろう。ナイト君が拳を振り上げて向かってくる。「滅」の魔力のこめられた拳だ。僕は手首を叩いていなし、額に掌底を打ち込んだあと、踵をナイト君の腹に突きこむ。

ナイト君は地を転がり、「闇」の隣で止まる。

「話しは最後まで聞いてよ」

起き上がったナイト君が僕を睨む。だが僕は話を続けた。

「彼女の身体は永い「滅」の力の行使でボロボロだ。正直、この魔宴が終わるまで持たなかつたろう。気にならなかつたか？十年前、十二歳くらいだった彼女が、何故今、少なくとも外見はナイト君と

同じくらいの歳なのか」

ナイト君は眉を歪ませる。だからなんだと言いたげだ

「彼女の成長は七年前に止まっている。その頃には既に三十まで生きられない身体だったろう」

「だったなんでそれもとめなかった！」

「とめるのが彼女にとつての恥辱だと思つたからだ。彼女はこの魔宴に文字通り全てを賭けていた。命さえも。その彼女を君は止めるというのか？それに、僕が彼女と知り合ったのは十年前のこの街君と同時期だ。その時には彼女は取り返しのないところまでいつてしまつていた」

ナイト君は僕の剣幕に怯む。唇をかみ締め、どこに向かいようもない怒りに堪えているようだった。

「話を戻そう。魔宴が終われば、ヘルブスト家にとってアイリス是一片の価値もない肉の塊となる。だから、僕は魔宴を好機と見た。彼女の心に一区切りの決着が付き、ヘルブスト家も彼女から目を離す。必要なくなるものなのだから、礼装を五、六個くれてやればすぐに了解したさ」

「なるほど。そういうことだったのね」

「闇」が少し笑いながらこちらを窺う。

「ヨル？」

ナイト君もその様子に気づいたのか、不審の視線を僕と「闇」に行きかわせる。

「ナイト、落ち着きなさい。彼女の目的は」

「そう。僕の目的はアイリスをヘルブスト家の呪縛から解放すること。そしてそれは心身ともにでなくてはならない」

「へ？」

ナイト君は今日何度目かもう分からない素つ頓狂な声を上げ、目を点にして僕を見つめている。

「それができたら後は寿命だけど、それは僕にあてがあつた」

僕はそう言い残して四神龍たちの張る結界の方に戻る。パルレが険しい顔をしてナイト君を睨んでいる。

「よく飛び出さなかったね。パルレ」

「主からの命の最中でしたから。ですが、癩に障ったのは確かです。主のお心も知らず、あの少年は勝手すぎる」

僕は八八八と場を濁して、アイリスの横に立つ。そして手刀で左手小指の第二関節より先を切り落とした。小指は瞬時に再生し、切り離された小指の先が宙に舞う。僕はそれを右手の上で浮かばせ、魔力で強引に霧散しようとする小指の先をとどめる。

「結界の維持レベルを最高に」

僕のその一言で結界の強度が増す。

僕は右手の上の小指の先、それを魔力に還元していく。

僕の身体は、真龍・元龍の身体、つまりエーテルで構成された反物質が、物質として固定化されているものである。切り離されたら、反物質を経て、宙に溶けていくのが道理。僕は小指をエーテルまで戻し、その魔力の質を「滅」であるアイリスに合わせる。

「滅」の魔力はドラゴンドライブという「光」にととても似ている。それに「炎」「雷」「甲」を少しずつ混合し、「滅」の魔力を再現する。

手の上にはアイリスの魔方陣と同じ赤黒い球体。僕はそれを彼女の身体に埋め込む。こうすることで僕の身体が彼女に溶けていく。その瞬間、アイリスの身体は赤黒い光を放つ。

ナイト君の「滅」の魔乖咒による効果が洗浄され、身体の欠損が再構成される。僕は自分の身体がうまく彼女に適合するように誘導し、変動し続ける数値を掌握し続ける。頭の前から足の指まで、間違いが許されない作業。まともな頭じゃ無理だと思つ。

光が治まり、結界の中にはすうすうと寝息を立てるアイリスの姿。僕と分かれたときのままの、綺麗な顔だ。

僕は四神龍たちに決壊を解除させ、オパールに彼女を抱かせて、ナイト君たちに向き直る。「闇」は啞然とこちらを見ていた。

「うそ……死者蘇生？それは「闇」系統第五咒法のはずよ……」
呆けたままの顔で彼女は僕に呟く。僕は魔乖咒使えないんだけどな。

「それは違うよ。第一アイリスは死んでいない。生きているものを蘇生させるだけなのだから、そんな神秘とは比べるべくもなく矮小な技だよ」

「でも、「滅」系統第四咒法で打ち抜かれたのよ、それを直すなんて、私でも無理だよ」

「僕のさつき使ったのは魔乖咒じゃない。そんなことは君も分かっているだろう。僕がしたのは……そうだな。「滅」で「滅」を吹き飛ばしたというところか」

その言葉にさらに彼女は目を丸くする。何がなんだか分からないのだろうな。

さて、まだ僕にはやることがある。僕はアイリスの懐から、魔導書<滅びゆく愚者ども<の挽歌>を取り出した。

「ナイト君、これは君のものだ。アイリスも、こういって気が来るのを予想していたのかもしれない。なにか沢山書き込んでいたよ。たぶん、君に教えていない魔乖咒や、戦術のことが書かれているんじゃないかな？」

ナイト君は僕の差し出した魔導書を受け取る。そしてしばらく眺めて言った。

「師匠。先生はどうなっただ？」

「蘇生したといっただろう？彼女は生きている。それが僕の目的だったのだから、そうでなくては苦労したくない。まあ、人としての幸せというのが重要なのなら、あきらめてもらおうしかないけど」

ナイト君は顔に疑問符を浮かべる。

「彼女は悠久の時を生きる存在になったということだ。時間で彼女はもう殺せない。よく本のネタであるだろう？不老不死の人間が周りの人間が年老いて死んでいくのを悲しむような描写が。今の彼女はまさにそれだ」

「え？」

「闇」もナイト君も、僕の話に全然ついてこれない。できるだけ噛み砕いて話したつもりんだけど、話が荒唐無稽すぎたのかな。

「と、とにかく先生は無事なんだな？」

「ああ。生きていることがイコール無事というのならね」

ナイト君は安堵の表情を浮かべ、オパールの手腕の中のアイリスを見る。そして全身の力が抜け、その場に座り込んだ。

「さて、「闇」の魔乖術師・てこれ言いにくいな。ヨルミルミでいい？」

僕に呼ばれたことで一人ブツブツと何かを呟いていた彼女はこちらに向き直る。

「え？ええ。かまわないわ」

「じゃあ、ヨルミルミにナイト君。これは僕からのプレゼントなんだけど……」

僕はそう言っつて、杖と刀をとり出す。杖をヨルミルミに、刀をナイト君に渡す。

「これは？」

ヨルミルミは僕に渡されたものを見て怪訝な顔をする。彼女の手には十字架の真ん中にチャクラムが溶け込まれたような、不思議な物体があるのだから。円の中心はポツカとト空いており、円と十字のぶつかる四箇所も円形になっていて、そのそれぞれの宝石がはめられている。

「君がさつき欲しがっていた魔杖だよ。第四咒法四回分は魔力を貯めておけるし、術式の高速化機能、そしてもっとも注目すべき、

ものはやはりその宝石だね」

ヨルミルミは受けとった杖の宝石を眺める。食い入るようには、
こういうことを言うのだろう。

「その宝石は、魔力をこめることでルビーが「雷」、パールが「
風」、サファイアが「甲」、ブラックオパールが「闇」の力を引き
出すようになってる。あ、ここで言う「闇」は魔乖咒の「闇」じ
やないから。まあ、あとでいろいろいじくって試してみてよ。宝石
の調整は彼女たちが行っているから、力だけは一級品だろうから」

この説明が終わる頃には、彼女はもう自分の世界にはいつている
ようだった。魔杖をその装飾一つ一つまで舐めるように見つめ、頬
ずりを始めた。そういえば、やけに多い回数競売に参加している少
女の話しを聞いたことがある。もしかして、彼女がそうだったのだ
ろうか。

そして僕はナイト君のほうを向く。

「ナイト君。普通、剣は魔乖術と併用できない。それは魔乖術師
が剣を武器として使うということじゃなく、剣に認められるかどう
かという話。それくらいは祖父から聞いているかな？」

「ああ。でもなんで師匠が俺の祖父のことを知っているんだ？」

「まあ、そんなことはいいじゃないか。それは魔乖咒と併用でき
るこの世に二振りしかない剣の一振り。さっきアイリスの攻撃で一
本吹き飛んだから、それがこの世で最後の一本になる。僕が使い続
けてちよつと変質してるけど、それは君に上げるよ」

「いいのか？そんな貴重な物をもらって・・・」

前の白木作りの刀とは正反対の、全てが黒い刀を握り、ナイト君
は言った。

「いいんだよ。僕は剣は使うけど魔乖咒は使わないからね。それ
は君が持つに相応しい」

僕は一息ついて、四神龍たちに視線を送る。この世界ともお別れ

だ。

「さて、ナイト君にヨルミルミ。分からないことだらけだと思っ
が、僕はここで失礼させてもらうよ。魔宴で負けたアイリスが、い
つまでも生きていると知れるのはよくない。それは魔術師に詳し
いヨルミルミなら分かるだろう?」

ヨルミルミは真剣な顔で首肯する。意地とプライドに満ちた彼ら
の世界を知っているから。

「ナイト君。アイリスは君にエゴを突き通すことを教えた。僕は
いつもはそういうことはしないけど、今このときに関してはそれを
させてもらう。アイリスは僕が異世界に連れ去らせてもらうよ。い
きなりこんなことを言われてもわけが分からないと思うけど、どこ
か遠い場所で生きていると知っておいてくれ」

ナイト君は僕を名残惜しそうに見つめる。しかし言葉を挟むこと
はしなかった。

「いいか、ナイト君。「滅」は弱い。「最強」と呼ばれているの
はアイリスであって「滅」じゃない。正面から闘うしか能のない力
は、戦争じゃ役に立たない。君が十年前僕に語ったとおり、「正義」
というものを貫きたいのなら、常に「最強」であれ。隙を見せるな。
隙を見せれば「滅」は簡単に敗北する。今日、実力で大きく勝るア
イリスが君たちに敗北したように」

僕は四神龍たちをカードに戻す。そしてブランクカードで今や龍
となったアイリスと契約し、五枚のカードを腰のホルダーにしまう。
もう二人は驚いていない。そういうものなんだと悟ったというより、
驚き疲れた感じだ。

「じゃあ、お別れだ」

僕は虚数空間を開く。入ろうとするが、ナイト君に呼び止められ
た。

「師匠……俺、ずっと師匠のことが……」

そしてなにか危険なことを言い出す。ああ、ナイト君は僕を女性
と勘違いし続けているわけだね。

「ナイト君、その先は言うな。僕、男だし」

「え？」

驚きつかれ、五人の人間（外見上）がカードになったことにも反応しなくなっていたナイト君の目が見開かれる。

「ええええええええええ！！！！！！」

僕はその驚愕の咆哮と共に虚数空間に身を投げた。

|||||
|||||

師匠が吸い込まれていった空間の出入り口が閉じ、辺りが静寂に包まれる。ナイトは悲しんでいるのか、寂しがればいいのか、嬉しがればいいのか分からない、なんとも形容しがたい気分です。立ってはい

「は・・・はは、俺の初恋が・・・」

だが自然に目から涙がこぼれてくる。悲しいわけじゃないのに。

「なんていうか・・・ご愁傷様？」

ヨルがそんなことを言う。ナイトの涙の量は増加した。

ひとしきり泣いて、落ち着いたナイトは師匠にもらった刀を抜きはらって見る。

それは異様な刀だった。そもそも鉄の色をしていない。師匠の髪の色と同じ、青い刀身。ちよつとどこの変質の騒ぎじゃなかった。抜き払った瞬間から、巨大な存在感が滲み出ている。敵と共にユーラシア大陸を両断しそうな勢いを醸し出している。

「は、はははははは！！！！！！」

それを見て、ナイトは笑いが止まらなかった。さすが師匠！正体不明にもほどがある！十年前もまったくどんな人か分からなかった

が、今はもつと分からない！

ナイトの第四咒法をうけた先生を蘇生し、不老にしてみましたとも言っていた。それに「終末の錬金術師」といわれる高位の礼装師でもある。そして最後は異世界に渡っていった。

「ちよつとナイト、どうしたのよ」

急に笑い出したナイトに、ヨルが怪訝な顔で話しかける。

「いや、メチャクチャだと思つてさ！さすが師匠！」

ナイトの気分は目下大暴走中だ。何故だか興奮が止まらない。超絶絶技、理解不能、荒唐無稽、そんな存在を目の当たりにして、他にどういふ気分であればいいか分からない。

「そうね。正直私も、彼の存在がまつたく分からないわ」

ヨルは自分のもらった杖を見て、メチャクチャ感を認識する。彼のしたことは蘇生だったり異世界へ渡ることだったり、実感が掴みづらい。中性的なあの話し方もそれを助長していた。

そんな中で、彼女が唯一実感できるとするなら渡された杖のことだ。第四咒法四回分の魔力を、既に彼が入っていたのだろう、内包し、それを使って第二咒法で自分の治療をしたのがさつき。術式の構築速度が段違いに上がっていた。それに四つの宝石は魔力をこめるとそれぞれ違う力を放つ。メチャクチャな杖である。彼女自身もナイトと同じく大声で笑いたい気分だった。

「あれ？」

そんな中、ナイトが何かに気づく。ヨルがナイトの方を見ると、魔導書<滅びゆく患者どもの挽歌>を開いて、中に書いてある文章を読んでいた。

「どうしたの？ナイト」

ヨルは魔導書を覗き込む。始めの方はちゃんと「滅」の術式が書かれているが、半分くらいから日記のような書き込みが目立つようになり、後半は乙女チックな嬉し恥ずかしの旅行記になっていた。

「あーはっはっはっは！！！」

ヨルは今度は笑いをこらえることができなかった。「最強」と謳

われ、厳格だった彼女が書くものとは思えない。ギャップが、メチヤクチャカワイイ！

ヨルが笑いながら転げまわるのを横目に、ナイトは師匠でも間違うことはあるんだな。いや、これは師匠だからできる間違いなんだと、見当違いのことを言っつてこの魔導書を渡した師匠のことを想った。ちよつと彼のことが身近になった気がした。

ボクヨル第五話 「滅」 Absolute (後書き)

書きあがったものの中には、会話の途中にオリジナル要素がちりばめられている場所がありますが、そこは削除しました。原作知らない人には辛い回です。申し訳ない。なにぶん原作が小説なので・・・。

ドラドラ特別話 D・ブレイク！ <前>（前書き）

ついに来た！この回が書きたかったんだ！

さて、ドラゴンドライブの世界に戻って、四神龍たちを具現化して僕がSさんの名義で借りていたアパートは引き払われるどころか建物そのものがなくなっていた。僕ら五人（アイリスはまだ眠っている）に一際長い沈黙が流れるが、なんとか意思の力で復活し、とにかくビジネスホテルでも借りてアイリスをカードから戻そうということになった。

ビジネスホテルの一室で僕はアイリスをカードから元に戻し、ベッドに寝かせて布団をかけた。

「さて、僕はちよつとSさんのところに行つてくるよ。オパールとザフィーアはここに残つてアイリスを頼むよ。パルレとルビーンは僕についてきて」

「承知しました」

「おう！分かったぜ！」

パルレとルビーンは頷く。

「行つてらっしゃいませ」

「……（コク）」

オパールとザフィーアの見送りを背に、僕らはSさんのもとに向かうのだった。

当然の話だが、Ri-onならばにRi-inは解体。上層部の事件の中心に関与した人間は懲役刑で刑務所に入っている。Sさん、Lさん、そして店長は実刑は免れたが、未だ執行猶予中のはずだ。

Ri-onが解体され、仕事を失ったSさんたちだったが、も

るもろの後片付けの後、ゲーム会社を立ち上げた。僕らもそれに協力していた。主にドラゴンの情報を伝えるということだ。

「つゝゝゝ」
ルビーンは僕の隣を、クレープを頬張りながら至福の顔をして歩いている。黒いスカートを振り乱して、足が若干ステップを踏んでいる。

僕らは今、始めに会った時の服装で歩いている。すなわち、ルビーンが黒のゴスロリ、パルレがベージュの軍服、そして僕が軽鎧にジャケットである。周囲からの好奇の視線が半端ない。

そして、十年前はSさんたちの会社があつた場所にたどり着いた。そんなに大きくない、少し色あせたビルである。確か、三階がSさんたちの会社だったはずだが、今はこのビル丸々一つが素晴らしい。僕はSさんのプログラミングルームに滑り込んだ。少なくとも十年前はそうだった。

そして、そこでは少し老けたSさんが作業をしていた。

「ただいま〜！！！」

僕はできるだけテンションを高くして再開の挨拶をする。

「ブウウウウー！！！」

Sさんは丁度飲んでいたモノを噴き出した。黒い液体が宙を舞う。どうやらコーヒーらしい。

「お、おま！十年もどこ行つてたんだ」

僕は十年前、誰にも言わずに姿を消した。すぐに戻ってくるつもりだったからだ。だが、アイリスと出会い、長居してしまっていたのだ。

「ん〜異世界？もちろん裏球じゃないところだけど」

「異世界って・・・まあ、お前のことだし・・・」

Sさんはやれやれといった様子でこぼしたコーヒーを拭く。だがとりあえずあの白衣は使い物になるまい。

「はあ……久しぶりだな、ルシア、パルレ、ルビーン」
僕はその言葉に頷く。

「はい。エージェントS」

「へへっ……!」

パルレはうやうやしく頭を下げ、ルビーンは嬉しそうに鼻を鳴らす。

「まあ、十年も姿を消していたことは許してください。こちらにも事情があったので。それで、ドラゴンドライブの復活は順調ですか?」

「……いや、やはりあんな問題を起こしただけあって政治の圧力がかかってるな。世間に出すのはこの会社がもう少し力をつけてからだ。ああ、そういえば雪野タクミと千穂田ネコはこの会社にいるぞ。もちろんしもな。会っていくか?」

「ええ、そうします」

「あいつらは今に階で会議中のはずだ。ビックリさせてやれ」

僕はSさんにハハハと笑って返し、プログラミングルームを出た。

「パルレとルビーンはどうする?久しぶりなんだし観光に行ってもいいよ」

「いえ、我が主。ついていきます」

パルレは落ち着いた様子でそう返した。

「そうだぜ?あたしも久しぶりにタクミたちに会いたいしさ!」

ルビーンは口の横についていたクリームを舐めとって僕に笑みを向ける。

「そうか。じゃあ行こう」

僕らは階段をおり始めた。

「どうやってあの頭の固い爺どもにドラゴンドライブを認めさせるか！ 私たちのこれからはそれにかかっていると断言しても過言じゃないわ！」

廊下にしさんの声が響く。どうも光の漏れる一室から出ているようだ。

「なんとか会社の規模を拡大させて、有無を言わさない力技であるのシワ妖怪どもを踏みつぶすのよ！」

これは会議と呼べるものなのだろうか。僕はこの会社の先行きが不安になる。ああ、ちなみにこの会社の社名は「R i - Q」というらしい。この社名も政治家たちに認められない原因の一つなんだろうな。

「まあまあ、落ち着いてくださいよしさん。もっと友好的に行きましようよ」

「甘い！ 駅前で売ってるストロベリー・チーズケーキ・クレープより甘いわ！」

さつきルビーンが食べてたやつである。有名なのだろうか。

「そんな弱腰じゃいつまでも私たちの目的は達成できない！ 叫ぶのよ！ ジイイクハイルウウウウ！」

とんでもないテンションである。たぶんその政治家もしくは官僚たちに何か言われたのだろうか。

立ち去るべきなのだろうが、僕はあえて空気を読まなかった。ドアノブに手をかけ、一期に扉を開く。

「ルシア・シュヴェリン三等兵！ ただいま帰還しました！」

僕はかかとをダンツ！ と打ちつけ、ビシツと敬礼した。後ろにいるパルレとルビーンも何だかわからないという表情をしながらも僕と同じ行動をとる。ちなみにルシア・シュベリンはこの世界での僕の戸籍名である。

「「「「「へ？」「」「」」」」」

アイリスは自分が死んだことを自覚していた。死んだのに何かが目覚めるモノなのかと不思議に思ったが、魂というモノがあれば、それも不思議でないかもしれないと回答を出した。

私がいるのは天国か地獄か、送られるなら地獄だろう。アイリスはそう思って周りを見渡す。地獄は何かビジネスホテルのようだった。安っぽいシートが太ももを滑る。

アイリスはとりあえず周りを見渡した。そして固まる。そこには自分の懸想する男性、女みたいな顔をして中世的な話し方をするが、考え方は誰よりも男くさい、ルシアという名の少年（あくまで見た目）だった。

ああ、確かにここは地獄かもしれない。たぶん、死んだ者が望むものを見せ、欲に溺れさせるのだ。そうしてきつと魂は汚れていくのだろう。だが、それも悪くない。自分はもう死んだのだ。魔宴にも決着はついたし、現世に未練はない。この地獄で欲に溺れ、汚れに汚れ、消滅していくのも一興だ。アイリスはルシアに抱きつき、両目をきつく閉じた。さあ、私を穢してくれ！

「え？ちよ、アイリス？」

しかし、ルシアの幻影は戸惑っているようだった。焦らしプレイか？さすが地獄、やるではないか。そう思った時だった。アイリスの顔に影がかかった。彼女は顔をあげ、影の方を見る。そこではルシアの従者であるパルレ、オパール、ルビーン、ザフィーアがアイリスの方を口元をヒクヒクさせながら睨んでいた。

アイリスは疑問に思う。ここが自分の考えている通りの地獄なら、何故彼女たちがいるのだろうか。そもそも、ここは地獄なのか？その前提すらぐらつき始めた。

「何をしているのですか？アイリス様」

オパールの引くつく口元が動く。迫力がやけにリアルだ。

一部を融合させ、龍と呼べるものにし、僕らと同じ不老となったこと。魔導書<滅び逝く患者どもの挽歌>をナイト君たちに渡して、あの世界を去ったこと。それを聞いたアイリスは……

「な、なんだと！？あの本を渡してきたのか!？」

顔を真つ青にした。実にせわしなく表情を変える。いつもの彼女らしくない。起きたばかりで本調子ではないのだろうか。ていうか、そこに反応するのか。不老になったとかではなく。

「うん。だってアイリス、魔導書にいろいろ書きこんでたでしょ？あれってナイト君のためにいろいろ書き込んでたんじゃないの？」

「そうではない!あれは……」

アイリスはほとんど身を萎ませていく。本当に、何なのだろうか。もしかして、彼女にとつて大事なことが書かれていたのだろうか。そう思った僕はなんだか申し訳なく思う。

「え……と、何か問題あったのかな。今からでも帰っていつてとつてこようか？」

「い、いや、なんでもない!気にするな!」

アイリスは目をそらして言う。気にするなっていうのなら本当に忘れるよ？

「じゃあ、もう気にしないことにするけど……。じゃあ、僕の話が続けるよ。この世界は僕のもといた世界で……とはいってもこの世界にドラゴンはいないんだけどね」

「何故だ?ルシア、お前は龍なのだろう?」

「そうだよ。ドラゴンがいるのは次元を引き裂いていけるもう一つの世界、「裏球」。そちらにはドラゴンだらけだ。ちなみに、この世界にもその「裏球」にも魔術師や魔術師みたいなのはいない。まあ、ドラゴンバスターといって、ドラゴンとも一対一で戦える力を持つ人間はたまにいるけど」

「……メチャクチャだな」

うん。僕もそう思う。何なんだろうかドラゴンバスターたちの肉

体のスペックは。人間やめてるんじゃないだろうか。特にヒステリックローズおかかえのあのオークションの司会はな。

「とにかくこの世界はそういう感じ。こっちの世界にいる限り、犯罪以外の厄介事はない。まあ、「裏球」も今は平和だけど」

「今は？では昔は違ったということか？」

「そうだね・・・十年前、僕とアイリスが出会った時から半年前くらいにこの世界も「裏球」も滅びかかってたな。物理的に」

僕の満面の笑みのその言葉に、アイリスは少しひるんだようだった。

「う・・・そうだったのか」

「で、滅びそうになってた原因が僕であるわけなんだけど」

僕というより真龍と元龍、そして裏で手をまわしていた「R i n」が本当の元凶だけどね。

「む、それは何だか納得だな」

「それ、ひどくない？」

「いや、それほど力だと思っただからだよ。その「裏球」の龍たちの中でも、ルシアはかなり上の力を持っているのではないか？」

それは正解だ。もっとも、かなり上というより、ぶつちぎりだが、でも棚ボタ的な何かで得た力なのでまったく自慢できない。

その後、僕たちは六人でこれからのことを話し合うのだった。

それから十六年。僕らはまたSさんの名義でアパートを借り、ドラゴンドライブの開発に関わってきた。ちなみに、家には一人メイドの格好をした者がいるが料理も掃除も当番制である。オパールはそれほど家事がうまいわけでもない。そもそもとが龍だし……。

もちろん、自分たちの鍛錬も欠かしてはいない。ずっとこの世界にすることはできないからだ。身体をなまらせるわけにはいかないし、そのつもりもない。

Sさんが生きている間は何とかごまかしてくれるだろうが、成長しない僕たちは不審に思われることは確実だ。では「裏球」で生きるかと言われればそれもNOだ。また他の異世界に行こうと思っっている。理由？僕らの趣味だけど？

この十六年、ドラゴンドライブの開発に関わってきた僕はかなり機械に強くなった。まあ当然の話ともいえる。そしてドラゴンドライブのテストプレイヤーも僕だ。どんな事故が起きても死なないからね。

それはそうと、ついに来たのだ！ドラゴンドライブの始動の日が！

僕は管理室から見ているが、受付カウンターには長蛇の列。登録と同時に壁一枚を全てくり抜いて設置された大型モニターの前に案内され、個人の資質を計るとともにそれぞれに合った特別な（市販されてない）パートナードラゴンカード1枚がプレゼントされる。それはこの場所での身分証代わりにもなるものだ。また、ゲーム内で使うと市販のカードよりもパラメータが5%高く設定されている。ちなみにもらった人以外使えない。

昔と違う部分はそれなりにあるが、最も違うのはトレーニングのデータをいじってコミュニケーションゲームにしたことかな。常時全国の体感機と繋がっており、「裏球」に似せた世界を旅できる。特にドラゴンをゲットできるとかいうことはないが、ゲーム内

でのみ使えるアイテムや各種イベントは多く設定されており、四神龍の祠では封印を解くと僕が出てきて世界を壊そうとするとかしな
いとか。

人々が行きかうエンタランスのモニターにはドラゴンドライブのCMがながれ、大型のものにはPVが映っている。出演者は僕、いや私だ。つまり女装した僕というわけだが、肉体を変化させ、少なくとも外見の体つきだけは女性にしているので本当の意味でStar Ocean3のマリア・トレイターがそこにいる。着ているのもブラウスにスカートと女性のものなので、女性以外には見えない画面の中の僕はゲームの紹介をしているはずだ。そう撮ったので間違いはない。

ちなみに、このCMがテレビでながれた時、芸能界は騒ぎになったらしい。あのCMに出ている女の子は誰だ、どこのプロダクションの子だ、そういう話で持ちきりになったらしい。そして「Ri-Q」に問い合わせが殺到する始末。もっとも、他で芸能活動するつもりは全くない。

と、そろそろ出番が来るな。僕は作業員用の通路に回るのだった。

パートナードラゴンの件がひと区切りつき、大型モニターにはPVがながれている。

「はあい、初めまして。私はルシア。今から新発表のゲーム、「ドラゴンドライブ」の紹介をするわ」

自分で撮っておいて何だが、びっくりするほどハマリ役だ。画面内の僕はカメラに向かってニコリと笑いかけている。正直やってる自分が笑えてくる。

「知ってる人は知ってるかもしれないわね。このゲームは今から約三十年前に誰もがハマった伝説のゲームよ。プレイヤーは自分の選んだドラゴンドライブカードで三十枚のデッキを作り、呼び出して戦うわ。カードにはドラゴンカード、エフェクトカード、D-パーツカードの三種類があるけど、始めはドラゴンカードについて説明するわ」

画面の中のぼ・いや私は華麗にポーズをきめ、隣に映ったドラゴンカードを紹介し始める。

「まず、知っておいてほしいのは、オフィシャルカードゲームと違って体感版ドラゴンドライブではレベルは絶対的な勝利条件にならないわ。レベルの高いドラゴンのパラメータが高く設定されているのは事実だけど、プレイングによってはレベル3のドラゴンでも十分にレベル5のドラゴンを倒せるし、レベル1か2でもダメージを蓄積させて倒せるわ。そして、レベルの高いドラゴンは倒された時、失うポイントが高いわ。プレイヤーの初期ライフは10ポイントで、ドラゴンが倒された時レベル分のポイントが引かれるから注意してね。また、手札にドラゴンカードがない状態でドラゴンが倒されると、オフィシャルカードゲームとは違って無条件に負けになるから気をつけてね。」

そしてドラゴンカードは、手札からパワースロットに置くことで具現化しているドラゴンのスキルのエネルギー源になるわ。スキルをここぞというところでうまく使って、勝利してね」

画面の中の私はスカートを振り乱してクルクル回転しながら画面の逆側に移る。そして先ほどまでたっていた方にはエフェクトカードが映された。

「次はエフェクトカードね。これは使用することによって短い間自分または相手のドラゴンに特殊な効果を付け加えることができるカードよ。この体感版ではエフェクトカードにパワースロットからのコストは必要ないから、どんどん使って頂戴。特に自分のドラゴンの回避力をあげる「見切りの極意」は重要よ。ドラゴンのコント

ロールに自信のある人は相手ドラゴンの回避、命中力を下げる「コンフューズガス」でも同じ効果が得られるわ。それに相手の攻撃を防御する「守護結界」も使えるわ。そしてコスト重視、レベル低めのモンスターで固めてとにかくいろんな種類のドラゴンを使いたいという人には決定力をあげる「ハイパーモード」「リトル3」「ポーンブリング」をぜひ採用してほしいわ。自分のデッキの特性を考えて、相性バツチリのエフェクトカードを組み込んでね」

そして私は一度画面から外れ、逆側からアップで登場してウインクし最初の位置に戻る。加えてやはり反対側にカードの絵が浮かぶ。

「最後はD・パーツのカードね。これはドラゴンのゲノムコードが合わないと使えないけど、ダメージを受けて壊れるまで永続的にドラゴンの能力をアップさせてくれるわ。けどその効果はエフェクトカードよりは弱いといえざるを得ないわね。けど、このカードがドラゴンの進化条件になっている場合もあるわ。D・パーツを装備した特定のドラゴンカードを破棄することで、手札のエッジ・オン・タイプのドラゴンを召喚できるわ。エッジ・オン・タイプの強さは皆もオフィシャルカードで知ってるわよね！」

カードの絵が引っ込み、画面の私は真ん中に立つ。

「さて、これで基本的なゲームの紹介は終わってたわ。後は実際に貴方の目で確かめて頂戴。じゃあ行くわよ。D・ブレイク！」

画面の中の私は四神龍を呼び出して去っていく。もちろんポリゴンだ。そしてまた最初から再生。

「さてみんな！お待たせ！ドラゴンドライブ始まるわよ！」

二十七年前と全くと言っていいほど変わらないしさんの姿が、体感機の近く、スクリーンの前にある。そして体感機には一つの空きがある。それは今回戦うメンバーも気になってるようだ。

「今回は最初ということ、ゲームの説明も兼ねるわ！ルシアちゃん、出て来てくれる？」

僕、いや私の名前が呼ばれる。今日の僕は性別女性である。P V
やCMできていたブラウスとスカートを身につけ、髪はメグルさん
によって丁寧に梳かれている。

通路から出て、Lさんの隣に向かう。会場がどよめいた。男子の
嬌声を中心であり、「CMの子だ。カワイイ!!!」という意見が
大半である。中学生くらいの女の子の中には何故かうっとりし始め
る者もいるが。

「この子はドラゴンドライブテストプレイヤーのルシアちゃんよ。
この子のプレイを参考にいろんな解説をしていくからそのつもりで
……て、誰も聞いてないわね」

会場は異様な熱気に包まれている。Lさんの声は届いていない。
僕はその中で、Lさんからマイクを拝借する。

「さて、私はルシア。ドラゴンドライブのテストプレイヤーで、
CMにも出てたからみんな知っていると思うわ。今回はドラゴンド
ライブの起動始めということで、事前に少しプレイしている私が参
加するのは少し悪い気もするけど、これからの皆さんのプレイング
を円滑に進めるためにこのゲームがどんなものなのか、感覚をつか
んでもらおうと知識のある私が参加することになったわ。よろしく」

ワアアアアアア!!!

すごい熱狂ぶりである。特に盛り上げようとしたつもりもないの
だが、まあ、みんな待ちに待ったゲームのサービス開始なのだ。し
ようがないのかもしれない。

唯一空いている体感機に深く腰掛け、ゆったりともたれる。上か
らフェイスガードが下がってきた。

「さあて、みんなの準備が整ったところで、いくわよー!!!」
Lさんは耳の通信機に手をかけ、右手を振り上げる。

「D - ブレイク!!!」

ドラドラ特別話 D・ブレイク！ <前>（後書き）

「ボーンプリング」なんてエフェクトカードはありません。ゲームの仕様上、D・Masterのカードがないので、そのエフェクトカード版ということまで。

今回はドラゴンドライブの勝負になりますが、出てくるカードはカード名以外（レベルや強さ）は僕の裁量によって決定しています。

それと主人公の名字のシュヴェリンはドイツの町の名前です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0019o/>

終焉をもたらす者

2011年10月7日23時43分発行